専門部のあゆみ

バレーボール…… 63
バスケットボール…… 64
卓球…… 65
ソフトテニス…… 66
サッカー…… 67
バドミントン…… 68
ソフトボール…… 69
剣　道…… 70
柔　道…… 71
ボクシング…… 72
弓　道…… 73
空手道…… 74
相　撲…… 75
ウエイトリフティング…… 76
体　操…… 77
ラグビーフットボール…… 78
陸上競技…… 79
ハンドボール…… 80
テニス…… 81
レスリング…… 82
水　泳…… 83
なぎなた…… 84
アーチェリー…… 85
自転車…… 86
カヌー…… 87
ボート…… 88
フェンシング…… 89
ゴルフ…… 90
ボウリング…… 91
ヨット…… 92
定時制・通信制支部…… 93

バレーボール専門部

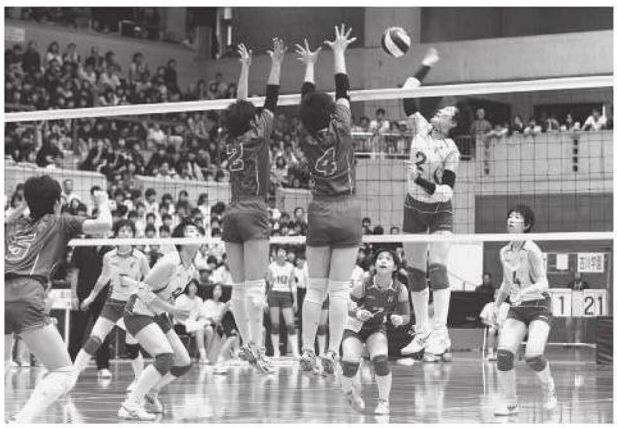
専門委員長
東風平　和　成

各県持ち回りとしては最後となる沖縄インターハイ『美ら島総体』が2010年に行われた。

男子の会場をバレーボールの盛んな宮古島で開催出来たことで注目を集めた。特に地元から参加した伊良部高校の応援に駆けつけた島民の大歓声には、大変驚かされた。

県勢は残念ながら男女ともに上位進出はならなかったが、県民の思いを乗せた歓喜の大声援に沖縄インターハイバレー競技の成功が伺えた。

沖縄開催に向け、競技力の向上はもちろんだが、リハーサル大会等を通して幾度となく取り組んできた補助員の育成や、時間を費やして緻密な連携を図った各部署のスムーズな対応は、大会を成功裏に導いた要因である。さらに、協会と連携して行ってきた上級審判の育成は、沖縄インターハイの成功だけではなく、今後の沖縄バレーの発展に繋がる大きな取組であったと期待する。



ここ数年間で、県のトップは男女とも着実にレベルアップしているが、全国・九州を制するまでには到っていない。

平成23年全九州バレーボール総合選手権大会、さらには平成25年度全九州高等学校体育大会バレーボール競技において、男子西原高校の準優勝が最高位にとどまっている。

沖縄県以上に全国・九州のレベルアップは進んでおり、とりわけ、九州は男女とも常に全国を制する争いを繰り広げている。国体予選を突破するのも至難の業になりつつある。

個人としては全国レベルで活躍できる選手が出てきた。平成25年3月に西原高校を卒業した山内美咲は全日本ジュニアに選出され、2年時の2012年10月にタイで行われた第16回世界ジュニア選手権大会に全日本代表として出場し、世界第3位の成績に貢献した。

また、現在西原高校3年の矢貫龍馬は192センチという長身からの攻撃力が認められ、平成24年度の全日本高校選抜強化選手に選出された。

この10年間の優勝チームは以下の通りとなっている。

平成15年
総体・・・男子：伊良部　女子：知念
新人・・・男子：西原　女子：中部商業

平成16年
総体・・・男子：伊良部　女子：中部商業
新人・・・男子：伊良部　女子：中部商業

平成17年
総体・・・男子：西原　女子：中部商業
新人・・・男子：美里工業　女子：中部商業

平成18年
総体・・・男子：西原　女子：中部商業
新人・・・男子：美里工業　女子：中部商業

平成19年
総体・・・男子：西原　女子：中部商業
新人・・・男子：伊良部　女子：西原

平成20年
総体・・・男子：西原　女子：中部商業
新人・・・男子：伊良部　女子：西原

平成21年
総体・・・男子：伊良部　女子：西原
新人・・・男子：西原　女子：西原

平成22年
総体・・・男子：西原　女子：西原
新人・・・男子：西原　女子：西原

平成23年
総体・・・男子：西原　女子：西原
新人・・・男子：西原　女子：西原

平成24年
総体・・・男子：西原　女子：西原
新人・・・男子：西原　女子：西原

平成25年
総体・・・男子：西原　女子：西原
新人・・・男子：　女子：

強化面が進む一方で、県内におけるバレーボールは、ここ数年で人口の激減している。特に男子のバレーボール離れは、喫緊の問題となっており、専門部としても、強化以上に普及への取り組みには力を入れる必要がある。

バスケットボール専門部

専門委員長
新　垣　　隆

沖縄県高等学校体育連盟創立60周年おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

平成16年度より専門委員長を引き継ぐ。その間、バスケットボール競技において、九州、全国大会で幾多の優秀な成績を残す。一番の思い出として、平成22年度に本県で開催された、「美ら島沖縄総体 2010」。バスケットボール専門部･補助員、それに携わるバスケットボール関係者、皆の力を結集し無事、成功裏に終える事ができた。また、県大会での数々の名勝負と県高体連の後ろ盾あっての事だと思います。

これからも、県バスケットボール協会をはじめ、ミニ連、中体連、クラブ連盟と連携を図りながら、成功に向けて取り組んでいきたいと思います。

では、平成16年度以降の10年間を振り返ってみます。

1．平成16年度
（1）高校総体〔男子：62校　女子：56校〕
①優勝校　男子：前原　女子：豊南
（2）新人大会〔男子：60校　女子：51校〕
①優勝校　男子：興南　女子：豊南

2．平成17年度
（1）高校総体〔男子：63校　女子：54校〕
①優勝校　男子：美来工　女子：豊南
（2）新人大会〔男子：57校　女子：51校〕
①優勝校　男子：北中城　女子：西原（初）

3．平成18年度
（1）高校総体〔男子：61校　女子：56校〕
①優勝校　男子：興南　女子：西原（初）
（2）新人大会〔男子：61校　女子：51校〕
①優勝校　男子：興南　女子：西原

4．平成19年度
（1）高校総体〔男子：63校　女子：54校〕
①優勝校　男子：興南　女子：西原
（2）新人大会〔男子：63校　女子：49校〕
①優勝校　男子：北中城　女子：西原
（3）九州・全国での活躍
①全九州大会：美来工（男子：４位）
②全国総体：興南（男子：ベスト８）

5．平成20年度
（1）高校総体〔男子：63校　女子：53校〕
①優勝校　男子：北中城　女子：中部商
（2）新人大会〔男子：60校　女子：50校〕
①優勝校　男子：興南　女子：普天間
（3）九州・全国での活躍
①全九州大会：北中城（男子：４位）

6．平成21年度
（1）高校総体〔男子：63校　女子：52校〕
①優勝校　男子：小禄（初）　女子：普天間
（2）新人大会〔男子：60校　女子：46校〕
①優勝校　男子：美来工　女子：那覇（初）
（3）九州・全国での活躍
①全九州大会：小禄（男子：３位）
②全国総体：小禄（男子：ベスト16）

7．平成22年度「美ら島沖縄総体2010」
（1）高校総体〔男子：63校　女子：51校〕
①優勝校　男子：美来工　女子：那覇（初）
（2）新人大会〔男子：61校　女子：48校〕
①優勝校　男子：興南　女子：糸満
（3）九州・全国での活躍
①全国総体：那覇（女子：ベスト16）

8．平成23年度
（1）高校総体〔男子：62校　女子：51校〕
①優勝校　男子：興南　女子：西原
（2）新人大会〔男子：60校　女子：47校〕
①優勝校　男子：小禄（初）　女子：西原
（3）九州・全国での活躍
①全国総体：西原（女子：ベスト16）

9．平成24年度
（1）高校総体〔男子：62校　女子：52校〕
①優勝校　男子：小禄　女子：西原
（2）新人大会〔男子：60校　女子：48校〕
①優勝校　男子：小禄　女子：小禄（初）
（3）九州・全国での活躍
①全九州大会：西原（女子：優勝15年ぶり）

10．平成25年度
（1）高校総体〔男子：62校　女子：52校〕
①優勝校　男子：興南　女子：那覇

○全日本代表選手
1．砂川　貴哉〔北中城：平成19年度　U－18〕
2．上原　大輝〔興　南：平成21年度　U－16〕
3．川上麻莉亜〔西　原：平成23年度　U－18〕
4．川上麻莉亜〔西　原：平成24年度　U－18〕
5．神里　　和〔小　禄：平成25年度　U－18〕

○優秀チームの部
1．西原高校女子バスケットボール部
平成24年度全九州高等学校体育大会〔優勝〕

○歷代専門部長
1．又吉重宏〔H15～H16〕
2．比屋根充〔H17～H20〕
3．大山　清〔H21～H22〕
4．喜納武信〔H23～H24〕
5．渡口　恵〔H25～　〕

○歷代専門委員長
1．比嘉良丞〔S50～H5〕
2．當山喜明〔H6～H11〕
3．伊佐茂敏〔H12～H15〕
4．新垣　隆〔H16～　〕

卓球専門部

専門委員長
伊志嶺　朝　司

沖縄県高等学校体育連盟創立60周年を迎え、お祝い申し上げると共に、これまで各競技において数多くの功績を挙げたこと、誠におめでとうございます。

卓球競技におけるここ10年間は、2010年「美ら島全国高校総体」に向けての強化と運営、そしてその後といった感じでしょうか。

記録より動向を見ていきたいと思います。県総体男子学校対抗においては、強化指定校の普天間が５度（H18・19､H23 ～ 25)、知念（H21・22)、南風原（H16・17）が２度となっており、平成21年からは、普天間と知念の２強時代となり、激しい優勝争いが行われた。

女子学校対抗は、強化指定校の普天間が６度(H18、H20 ～ 24)、コザが３度（H17、19、25）となっており、普天間、コザの２強を軸に優勝争いが展開された。

個人戦においては､男子は､大田(南風原)､佐藤(知念)、宮里、友寄、中村（普天間)、女子は、仲宗根、狩俣（普天間）が三冠を達成した。特に仲宗根菜月は、3年連続三冠の金字塔を打ち立てた。ダブルスにおいては、大田・仲里組（南風原）の３連覇、仲村（普天間）がペア（禱、友寄、川崎）を変えての３連覇､女子の狩俣（普天間）もペア（仲宗根､比嘉、比屋根）を変えての３連覇。大城姉妹の制覇。シングルでは、大田兄弟の同時制覇、友寄兄弟の制覇など話題が多かった。

県新人大会においては、男子学校対抗は、普天間が７度（H18、H20 ～ 25)、南風原が２度（H16・17)､コザが1度（H19）制覇。優勝はしていないが、４強に知念、浦添が７度、前原が６度が入っており、この３チームの活躍も見逃すことはできない。

女子学校対抗は、コザが５度（H16 ～ 18、22、25)、普天間が３度（H20、21、23)、具志川、前原が1度制覇。女子は、普天間、コザの２強を軸に優勝争いが展開され、それを前原、具志川が追う展開が多かった。

個人戦では、男子は､宮里､友寄､仲村､仲宗根（普天間)､女子は､仲宗根､狩俣（普天間)､川上（前原)、玉城（コザ）が三冠を達成した。仲宗根菜月、仲宗根朝也の兄弟での三冠達成は史上初の快挙である。

九州総体の女子学校対抗においては、普天間女子が､５年連続(H20 ～ 24) ８強入りし､特にH24年は、第２代表の前原が、佐賀の第1代表を撃破し、史上初めて県勢２校が８強入りした。個人戦では、H18年度に、大田耕平・仲里達也組（南風原）が18年ぶりに４強入りした。H22年は、仲宗根菜月・狩俣道世（普天間）が４強､山根由莉・上江洲有沙組（コザ）が８強入り、H23年は、狩俣道世（普天間）が４強、友寄隆也（普天間）が８強入り。H24年は、狩俣（普天間）が８強入り、H25年は、比嘉秀成・比嘉秀充(普天間)の兄弟ダブルスが､８強入りした。

全国高校総体においては、H20、21年度に仲宗根（普天間）が２年連続３回戦進出した。H22年度の美ら島沖縄総体においては、女子ダブルスで仲宗根菜月・狩俣道世（普天間）が4回戦に進出しベスト16強入り。男子シングルスで友寄隆也（普天間）が４回戦に進出し32強入り､平安山丈継（知念）も3回戦進出した。H24年は、狩俣（普天間）が３回戦進出した。

九州新人大会においては、普天間女子がH21年に５位、普天間男子がH22、23年に４位、H24年に７位で、全国選抜の出場権を獲得した。４年連続の予選突破は、史上初である。

以上のように､美ら島沖縄総体の強化が実を結び、過去にない成果を上げた10年でした。沖縄においてもしっかりとした強化をすれば、結果が残せることを証明できた点では､大変良かったと思う。一方、美ら島総体後、男女とも参加校、参加人数の減少、トップ選手の県外流出が続いており、競技の普及、強化の面で新たな課題を抱えることとなっている。

最後に美ら島総体においては、関係者並びに地元の高校生、大学生等に熱意ある協力で成功りに終わることができて心より感謝の意を表したい。また、専門部としても県協会や各校の協力と指導を得ながら、今後の競技の発展・向上のために努力していきたいと思います。

☆専門部長（平成16年度より）

平成16～17年	宮　良　行　雄	（八重山）
平成18～20年	金　城　　啓	（石　川）
平成21～22年	嘉陽田　博　史	（石　川）
平成23～24年	我那覇　　念	（浦　添）
平成25年～	渡久山　　修	（美里工業）

☆専門委員長（平成16年度より）

平成16～22年	真　島　　格	（コ　ザ）
平成23年～	伊志嶺　朝　司	（コ　ザ）

ソフトテニス専門部

専門委員長
東　　竜一郎

平成15年から平成24年の10年間を私自身が専門部として携わってきたことを交えて、振り返ってみたい。

1．ソフトテニスの現状

ソフトテニス競技は、明治時代にイギリスのローンテニスが日本に伝わったのが起源であるとされ、比較的安価であったゴムのボールを使用し、軟式庭球として日本中に広がった。老若男女を問わずプレーできるところが魅力である。しかし、近年のスポーツの多様化や屋外での長時間の練習による日焼けの問題などの影響からか、競技者の減少が危惧されている。本県の高校生も例外ではなく、県高校総体参加数はこの10年間で約130名の減少が見られた。特に女子の減少は顕著であり、登録人数で男子よりも少なくなっている。

近年の大きな変化としては、テニスコートのサーフェスがクレーから砂入人工芝（オムニ）が主流になってきたことがある。少々の雨天時でも試合が行えるため、大会が計画通りに開催され、運営の面でも大きく改善された。シングルスの高校生への導入も平成24年から本格的に始まった。インターハイへの導入は未定であるが、平成27年度国民体育大会から団体戦の中に組み込まれる。

2．大会成績

県内大会の成績は、男子団体は名護が３連覇を含む５回、向陽と那覇西が２回、南風原が１回の優勝で４校が上位を占めていた。個人戦は名護が５回の優勝、向陽２回、南商、名商工、那覇西が１回であった。女子団体は名護が３連覇を含む６回の優勝、豊見南が３連覇で３回、首里東が１回で、個人も名護が７回、首里東が２回、豊見南が１回と名護を中心にして戦いが繰り広げられたのがわかる。

九州大会における顕著な成績は、団体では男子が平成17年の九州新人で名護が準優勝、南商が５位で史上初の２校選抜出場、名護は翌年の平成18年にも沖縄県勢として３度目の九州新人制覇を成し遂げた。九州総体で平成19、20年に名護が３位に入賞している。女子では、平成16年に名護が沖縄県勢初の九州新人優勝を成し遂げ、その勢いで全国選抜においてもベスト８に入った。九州総体では平成18年に那覇西が、平成23年に名護が共に３位入賞したのが団体の最高である。

個人戦では九州新人で平成23年に男子上原李輝・仲地享太（名商工）、女子外間夏海・仲村朝香（名護）が３位入賞、九州総体では、女子で平成17年に前底有美・大城夕香、金城友佳・永山加奈子（ともに豊見南）が３位の成績を修めた。

全国大会では、女子団体で平成22年地元開催の美ら島総体で名護女子がベスト16に入ったのが最高。個人戦では男子で平成20年の全国総体で渡部勇太・川平築（向陽）がベスト16、ハイスクールジャパンカップで男子平成18年渡具知豊・比嘉雄大がベスト16、平成24年神里裕介・川平祐也がベスト８に入った。女子では平成16年の金城友佳・神谷瑞恵（豊見南）ベスト８、平成22間夏海・山入端海月（名護）、平成23間夏海・比嘉千菜美がベスト16に進出した。

3．今後の課題と展望

私たち専門部としては、仲間を増やすことが求められており、長い目でみれば、教え子たちが教師を目指し、指導者になってくれることを夢見て、目の前の生徒たちに情熱を注ぎ続けるしかないと考えている。強化に力を注ぎ、九州や全国大会で上位進出すること、指導者を増やし、多くの生徒にソフトテニスの楽しさを知ってもらうことの強化と普及の両方の活動が必要とされている。これからも県連盟や中体連などと連携し、交流試合や合同の講習会などを企画して、さらなる発展に努めていきたい。

全国で活躍している神谷絵梨奈選手（糸満高校出身）現在はヨネックスに所属し、ナショナルチームに選出されている。（写真は平成 24 年度国民体育大会）

サッカー専門部

専門委員長
宮　里　和　宏

沖縄県高等学校体育連盟創立60周年おめでとうございます。

創立50周年から60周年の過去10年間を振り返ってみると、やはり平成22年度に本県で開催された全国高校総体「美ら島沖縄総体2010」が一番大きな出来事であろう。うるま市実行委員会と連携し、８会場・８日間かけて大会を運営した経験は専門部の大きな財産となった。しかし、大会を迎えるまでには様々な課題があり、それを解決するために知恵を絞り、多くの努力を要した。当時の北川敏之専門委員長やうるま市実行委員会事務局の皆様には深く感謝の意を表したい。

その後、平成24年度には九州ブロック国民体育大会、平成25年度には全九州高等学校体育大会が本県で開催されたが、「美ら島沖縄総体2010」の経験と本県サッカー協会との連携により無事運営することができた。上記以外にも過去10年間では平成17年度に全九州高等学校体育大会（サッカー競技）を本県で開催している。

また、平成25年度には16年ぶりに宮古で県高校総体を開催したが、宮古島市をはじめ地区高体連関係者、地区サッカー協会の方々の協力で無事終了することができたことに対し、改めて感謝申し上げます。

過去10年間の本県高校サッカー競技力をみると、特筆すべきは平成17年度に千葉県で開催された全国高等学校総合体育大会で那覇西高校が準優勝を果たしたこと、平成18年度に兵庫県で開催された第61回国民体育大会で沖縄県選抜が見事優勝を果たしたことがあげられる（決勝戦引き分けにより千葉県選抜と両チーム優勝）。これらの結果は本県の選手・指導者をはじめ、サッカー関係者に大きな自信や夢・希望を与えることになった。ちなみに沖縄県選抜が優勝した第61回国民体育大会から少年の部がU-16で実施され、高校１年生が主体のチーム構成となり、これまで以上に中学年代指導者との連携も求められることとなった。

全国高校総体の成績を見ると、先ほど述べた那覇西による平成17年度の準優勝以外ではベスト16に那覇西が３回（平成18・21・22年度）進出している。

また、全国高校選手権を見ると、ベスト16に那覇西４回（平成16･18･20･22年度）、那覇１回（平成19年度）進出しているが、平成６年度に那覇西が果たした県勢初のベスト８の壁をなかなか越えられない状態が続いている。

今後、競技力向上を図るには指導者の資質向上と日本サッカー協会が提唱している「一貫指導」をより一層推進し、各年代指導者との交流や連携を図る必要がある。そしてここ数年深刻である「優秀選手の県外流出」を抑え、県高体連創立70周年の頃には全国の強豪県の仲間入りを果たせるよう努めたい。

女子については平成24年度に全国高等学校総合体育大会で正式種目となった。沖縄では平成５年度から県総体で競技会が実施される等、女子サッカー熱は高い。加盟校数は全国上位の位置におり、平成25年７月現在で25校となっている。しかしながら指導者の数は少なく、今後は女子部の充実を図るとともに女子の指導者・審判員の育成を本県サッカー協会と連携していく必要がある。

今後も一専門部として、沖縄県高等学校体育連盟のますますの発展に寄与できるよう努めていきたい。

歴代専門部長（平成16～25年度）
瑞慶山　正（平成16～17年度）
根路銘　章（平成18～19年度）
平良　勝也（平成20～21年度）
安里　辰洋（平成22年度～）

歴代専門委員長（平成16～25年度）
内間　直行（平成16～17年度）
北川　敏之（平成18～23年度）
宮里　和宏（平成24年度～）

バドミントン専門部

専門委員長
下　地　敏　彦

沖縄県高等学校体育連盟創立60周年、おめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

バドミントン競技におけるこの10か年を振り返ってみると、平成22年度沖縄美ら島総体がすべての面に影響を与えていた10年間であったと思います美ら島沖縄総体５～６年前からの競技力向上のための強化期間、22年度の本番、それ以降の競技力の維持・発展という流れであった。また、競技力向上の面だけではなく、美ら島総体での本番や、それ以前のリハーサル大会を行うことで運営面での技能向上もかなり見られ、それ以降の専門部としての運営が自信をもって取り組めるようになりました。

１．県総体・新人総体の優勝校

	県高校総体		県新人総体	
年　度	男	女	男	女
平成16	豊見南	北　谷	糸　満	那覇西
17	糸　満	糸　満	糸　満	糸　満
18	糸　満	糸　満	コ　ザ	糸　満
19	沖　水	糸　満	沖　水	糸　満
20	沖　水	糸　満	沖　水	糸　満
21	沖　水	コ　ザ	沖　水	コ　ザ
22	沖　水	コ　ザ	沖　水	石　川
23	沖　水	コ　ザ	沖　水	コ　ザ
24	沖　水	コ　ザ	沖　水	コ　ザ
25	沖　水	コ　ザ		

県総体でみると、学校対抗で男子はそれまでの豊見南・糸満の連覇から沖水がその地位を奪取して、現在まで７連覇を続けている。女子においても、それまでの糸満の連覇をコザが阻み、現在まで５連覇継続中である。新人総体でも同様な傾向が見られる。これからこの両校が連覇を続けるか、または新興勢力や古豪の復活なるかが注目される。

個人戦において、県総体や新人総体では男子の沖水、女子のコザのエースがその年度の王座に就いている傾向がある。

２．県外大会でのおもな実績

平成18年度
九州選抜大会　個人複　糸満３位
九州選抜大会　団体女子　コザベスト８

平成19年度
九州選抜大会　男子個人単　沖水・野原優勝
九州選抜大会　女子個人単　糸満・上村２位
全国選抜大会男子個人単　沖水・野原ベスト８

平成20年度
九州選抜大会　女子個人単　糸満・上村２位

平成21年度
九州総体　　女子個人単　糸満・上村優勝
九州選抜大会　女子団体　コザベスト４
全国総体　　男子個人複　沖水ベスト16

平成22年度
全国総体　男子個人単　沖水・金城ベスト16

平成23年度
九州総体　男子個人単　沖水・新垣ベスト８
九州選抜大会　男子団体沖水・糸満ベスト８
九州選抜大会　女子個人複　沖水ベスト８

平成24年度
九州総体　男子個人単　沖水・神谷ベスト８
九州選抜大会　男子個人単　沖水・神谷２位
九州選抜大会　男子個人複　沖水２位
九州選抜大会　女子個人複　コザ３位

平成25年度
九州総体　男子個人単　糸満・西平ベスト8
全国総体　　男子個人複　沖水ベスト16

この10年間の県外大会の実績は、過去にないくらいの充実したものとなりました。

その中で特筆すべきは、平成19年度九州選抜大会男子個人単優勝・同全国選抜大会ベスト８の沖水･野原と平成21年度九州総体女子個人単優勝の糸満・上村の実績である。これらの成果は専門部の大きなはげみになりました。今後10年間ではこれらの実績を上回れるように取り組んでいきたい。

ソフトボール専門部

専門委員長
渡　口　竜　次

ソフトボール専門部は、県総体男子39回・女子49回の大会を迎えた。以前はソフトボールといえば沖縄という時代もあり大変強い時期もありましたが、平成16年以降はチーム数・選手ともに減少傾向にあり、最近ではオリンピック種目からも外され大変厳しい状況にきている。

平成16年～25年の間には、平成22年に本県で開催された「美ら島沖縄総体2010」があり、今大会では思うような結果を残すことができませんでした。しかしこの10年間は男子において全国総体準優勝１回、九州制覇５回と徐々に力を付けてきている。

今後は全国・九州大会において上位進出できるよう競技力向上を期待している。

平成25年度
●県インターハイ予選
【男子】優勝：読谷　　準優勝：嘉手納
【女子】優勝：コザ　　準優勝：浦添商業

平成24年度
●県インターハイ予選
【男子】優勝：嘉手納　（大会３連覇）
　　準優勝：読谷
【女子】優勝：浦添商業　準優勝：普天間
●新人大会
【男子】優勝：読谷　　準優勝：具志川
【女子】優勝：読谷　　準優勝：コザ

平成23年度
●県インターハイ予選
【男子】優勝：嘉手納　　準優勝：読谷
【女子】優勝：読谷　　準優勝：浦添商業
●新人大会
【男子】優勝：嘉手納　　準優勝：読谷
【女子】優勝：読谷　　準優勝：浦添商業
●第66回国民体育大会
　　準優勝：沖縄選抜（少年男子）

平成22年度
●県インターハイ予選
【男子】優勝：嘉手納　　準優勝：読谷
【女子】優勝：読谷　　準優勝：浦添商業
●新人大会
【男子】優勝：読谷（大会３連覇）
　　準優勝：嘉手納
【女子】優勝：読谷　　準優勝：知念
●九州高校総体・九州高校秋季大会
【男子】優勝：読谷

平成21年度
●県インターハイ予選
【男子】優勝：具志川　　準優勝：読谷
【女子】優勝：浦添商業　準優勝：知念
●新人大会
【男子】優勝：読谷　　準優勝：美来工科
【女子】優勝：読谷　　準優勝：浦添商業
●九州高校春季大会
【男子】優勝：読谷

平成20年度
●県インターハイ予選
【男子】優勝：読谷　　準優勝：具志川
【女子】優勝：浦添商業　準優勝：知念
●新人大会
【男子】優勝：読谷　　準優勝：具志川
【女子】優勝：読谷　　準優勝：知念
●九州春季大会
【男子】優勝：美来工科　※２校同時
●全国インターハイ
【男子】準優勝：読谷
●第 63 回国民体育大会
　　優勝：沖縄選抜（少年男子）※８県同時

平成19年度
●県インターハイ予選
【男子】優勝：読谷　　準優勝：具志川商業
【女子】優勝：知念　　準優勝：浦添商業
●新人大会
【男子】優勝：美来工科　準優勝：具志川
【女子】優勝：知念　　準優勝：浦添商業

平成18年度
●県インターハイ予選
【男子】優勝：読谷　　準優勝：美来工科
【女子】優勝：知念　　準優勝：浦添商業
●新人大会
【男子】優勝：普天間　　準優勝：読谷
【女子】優勝：知念　　準優勝：浦添商業

平成17年度
●県インターハイ予選
【男子】優勝：読谷　　準優勝：美来工科
【女子】優勝：浦添商業　準優勝：読谷
●新人大会
【男子】優勝：美来工科　準優勝：普天間
【女子】優勝：知念　　準優勝：読谷
●九州春季大会
【男子】優勝：読谷

平成16年度
●県インターハイ予選
【男子】優勝：読谷　　準優勝：具志川
【女子】優勝：浦添商業　準優勝：知念
●新人大会
【男子】優勝：読谷　　準優勝：具志川
【女子】優勝：読谷　　準優勝：嘉手納

剣道専門部

専門委員長
前　村　幸　芳

1　はじめに

このたび、沖縄県高等学校体育連盟が創立60周年を迎えましたことを心からお祝い申しあげます。60周年記念誌の発行にあたり、これまでの剣道専門部のあゆみを記させて頂きます。

創立60周年をむかえるまでの10年間は、平成22年「美ら島総体」に向けた取組と、総力を挙げた大会運営・選手強化が何より心に残る年月であった。そして、総体後は、そこで培われたノウハウを維持できるよう剣道専門部の役員各自が努め続けてた３年間であったと考える。

2　過去10年の大会成績

（1）県総体及び新人大会

平成16年度より25年度までの沖縄県総体及び県新人大会の団体戦試合結果は以下の通りである。

年度	県総体		県新人	
	男子	女子	男子	女子
16	豊見城	興　南	興　南	豊見城
17	豊見城	豊見城	興　南	興　南
18	興　南	豊見城	興　南	豊見城
19	那　覇	豊見城	興　南	豊見城
20	興　南	那　覇	興　南	那　覇
21	那　覇	那　覇	興　南	興　南
22	興　南	興　南	那　覇	興　南
23	興　南	興　南	興　南	興　南
24	興　南	興　南	那　覇	那　覇
25	那　覇	興　南		

沖縄県高校総体並びに県新人大会を見ていくと、平成19年度までは、興南高校と豊見城高校を中心に覇権を争っており、20年度以降からは興南高校対那覇高校が優勝争いの軸となっている。また、昭和薬科大学附属高校や前原高校は安定して上位をキープし、豊見城高校や首里東高校は以前の活気を取り戻している。更に、南風原高校やコザ高校、開邦高校、那覇国際高校は虎視眈々と上位を伺っている。

3　九州・全国における活躍

（1）九州大会

男子団体戦では、平成16年（豊見城）、18年（興南）、21年（興南）、22年（興南）と予選リーグを突破し、ベスト８進出を果たしている。同じく、女子団体戦は、平成20年（那覇）、21年（那覇）、23年（那覇）（興南）、25年（那覇）と予選リーグを勝ち抜き、特に平成23年宮崎大会では那覇高校と興南高校が揃ってベスト８入りし、那覇高校は
更に３位入賞を果たした。男子個人戦は16年本部朝土（豊見城）、24年桃原竜矢（那覇）がベスト８。女子個人戦では16年島尻奈美（豊見城）、18年本部世理華（豊見城）、21年仲本瑞希（那覇）、24年伊波瞳（興南）がベスト８に進出し、仲本は沖縄県勢初の九州制覇を果たす活躍をみせた。

（2）全国総体

男子団体は、16年（豊見城）、18年（興南）、22年（興南）（那覇）が予選リーグを突破しベスト16に進出した。女子団体は、16年（興南）、18年（豊見城）、19年（豊見城）、20年（那覇）、22年（興南）が決勝トーナメント進出。19年（豊見城）はベスト８入りの活躍をみせた。男子個人戦は24年に川上修史（那覇）が４回戦（ベスト16）に進出したのが過去10年で最良の実績。女子個人では18年に本部世理華（豊見城）が３位に入賞するという快挙をあげ、翌年もベスト８に進出し、２年連続で優秀選手賞を手にした。また、24年には高間佳奈子（那覇）が４回戦進出を果たしている。

4　「美ら島沖縄総体」

平成22年度に本県にて開催された「美ら島総体」は、多くの得難い貴重な経験や、成長する糧を私たちに与えてくれた。

大会終了まで毎日のように通った名護までの高速道路。総体開催が近づくにつれ整備されていく体育館。昼も夜も頑張った県外視察。大会当日の会場整理券配布所での混沌とした応援団とのやりとり。大会終了後、片付け撤去の疾風の如き早さ。そして、全てが終了して閑散とした体育館の静けさ。今思い起こせば、懐かしく遠い昔の出来事のようであるが、ほんの３年前の事である。

誰もが未経験者であり、不安と焦り、苛立ちを押さえ懸命に励んだが、中でもご苦労されたのは、当時の中村均専門委員長だった。我々には一切そのような素振りを見せず、淡々と仕事をこなしていた姿が懐かしく思い出される。

5　おわりに

剣道専門委員長は平成18年から佐久川朝洋先生から中村均先生、24年度からは前村へ専門委員長が交代した。その間「美ら島総体」という大事業を経験し、より充実した専門部となった。

両専門委員長のご苦労に感謝し、剣道専門部が一致団結して今後の発展に邁進する事を記し、むすびと致します。

柔道専門部

専門委員長
宮　城　　傑

10年間の動向（上位校の推移）

○沖縄県高校柔道の10年間を振り返ると男子においては沖縄尚学高校と那覇西高校がほとんどの大会で決勝戦を行う２強時代でありました。
その２強時代は今年度も同様でありますが、ここ数年間の沖縄尚学高校の実力はずば抜けており１強時代と言っても過言ではない安定感をもっています。他校のより一層の頑張りが県高校柔道のレベルアップにつながると考えます。
女子においても沖縄尚学高校がほとんどの大会で優勝を収めており、全国でも上位の成績を残しています。
先に挙げた２校が他校より頭ひとつ抜けており、あとを追うチームとしては男女ともに豊見城高校がベスト４の力を常に維持しているところであります。
そのほかにも毎年、身体能力の高い宮古勢が上位を伺っている状況であります。

特筆する内容

○平成 17、18 年度全国高校総体において男子個人 100 kg級の七戸　龍（那覇西）が２年連続３位と好成績を収めた。

○平成21年度全国高校総体において女子個人 48 kg級の饒平名知子（沖縄尚学）が全国優勝を果たした。県勢女子柔道では初めての快挙であった。

○平成 22，23年度全国高校総体において女子48 kg級の當間まみ（沖縄尚学）が２年連続３位と好成績を収めた。

○平成24年度全国高校総体において男子個人100 kg超級の神谷　快（沖縄尚学）が準優勝を果たし女子個人78 kg級の新垣さつき（沖縄尚学）が１年生ながら３位入賞と健闘した。

平成 16 年～平成 25 年の県総体上位校（男子）

	優勝	２位	３位	４位
25 年度	沖縄尚学	那覇西	宮古総実	豊見城
24 年度	沖縄尚学	那覇西	豊見城	球　陽
23 年度	沖縄尚学	那覇西	豊見城	球　陽
22 年度	沖縄尚学	那覇西	宮　古	読　谷
21 年度	沖縄尚学	那覇西	豊見城	読　谷
20 年度	沖縄尚学	那覇西	宮　古	豊見城
19 年度	沖縄尚学	那覇西	豊見城	那覇工業
18 年度	那覇西	沖縄尚学	那覇工業	豊見城
17 年度	那覇西	沖縄尚学	コ　ザ	宮　古
16 年度	沖　尚	那覇西	コ　ザ	宮　古

平成 16 年～平成 25 年の県総体上位校（女子）

	優勝	２位	３位	４位
25 年度	沖縄尚学	豊見城	宮古総実	豊見城南
24 年度	沖縄尚学	那覇西	豊見城	豊見城南
23 年度	沖縄尚学	那覇西	北　谷	豊見城
22 年度	沖縄尚学	那覇西	豊見城	北　谷
21 年度	沖縄尚学	那覇西	豊見城	中部農林
20 年度	沖縄尚学	那覇西	豊見城	コ　ザ
19 年度	沖縄尚学	那覇西	コ　ザ	興　南
18 年度	沖縄尚学	那覇西	豊見城	興　南
17 年度	那覇西	沖縄尚学	興　南	宜野座
16 年度	沖縄尚学	那覇西	豊見城	宜野座

平成22年度全国高校総体は都道府県単独開催最後の沖縄県開催「美ら島総体」であった。県高体連柔道専門部の頑張りはもちろんだが、沖縄県柔道連盟や関係各機関の協力と全日本柔道連盟また全国高体連柔道専門部の先生方のご指導のおかげで無事終了することができた。

その経験をいかして、平成24年度は九州中学校柔道競技大会、九州ブロック国体、九州新人高校柔道大会と大きな大会が３つも沖縄県開催にあたりましたが「美ら島総体」での自信が活きた年となりました。

今年は世界柔道選手権がブラジル（リオデジャネイロ）で開催されるが沖縄県から３人目の出場となるとなる 100 kg超級七戸　龍（那覇西出身）が日本代表に選出されるなど、これから沖縄県の柔道界から有望選手が多数輩出できるよう柔道専門部一同、努力していきたいと思います。

ボクシング専門部

専門委員長
島　尻　英　明

この度、沖縄県高等学校体育連盟が60周年という大きな節目を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。また、本専門部に格段のご高配とご協力をいただきました関係各位に感謝申し上げます。

本専門部は昭和40年に正式にボクシング専門部として承認され、過去多くの全国総体の優勝者と、2名のオリンピック選手、6名の世界チャンピオンが誕生してきました。しかしながら近年では、競技者及び、参加校の減少により、競技力の低迷が続き優勝者が出ていないのが現状であります。平成22年度に本県で開催されました全国高校総体におかれましても、好成績が期待され地元の観衆が見守る中、選手たちも奮闘いたしましたが、8位入賞一人という悔しい結果となりました。本専門部の課題として、競技の普及、指導者の育成と専門部組織の拡充が挙げられます。国内のボクシング連盟の流れといたしましても、ジュニア層の育成を目的に、県内外でジュニア大会が開催されはじめました。それに伴い、ジュニア大会を経験してきた、選手が県総体・九州新人大会等で成果を上げ始めています。今後、彼らが全国大会で好成績を挙げてくれることを期待しております。

本専門部といたしましても、ボクシング競技の普及と更なる沖縄県の競技力向上を目指し、各関係団体との連携しながら、努力していく所存ですので、今後とも御指導よろしくお願いしたします。

10年間の全国総体での3位以上の主な入賞実績。

平成16年度
フライ級　3位
山内 昌吾君　中部工業（現 未来工科）

平成19年度
ライトウェルター級　準優勝
知念 健太君　沖縄尚学
フライ級　3位
羽地 克起君　沖縄尚学

平成20年度
ライトフライ級　3位
美崎伸弥君　八重山農林高等学校
ウェルター級　3位
仲田詢弥君　沖縄尚学高等学校

平成21年度
フライ級　準優勝
喜久里正平君　沖縄水産高等学校
フェザー級　3位
玉城蓮君　沖縄尚学高等学校
ライト級　3位
上原健太君　沖縄尚学高等学校

平成23年度
ライトウェルター級　準優勝
金城大明君　那覇
ウェルター級　準優勝
髙江洲正達君　沖縄尚学
ミドル級　準優勝
ジュリアンジョンソン君　宮古総合実業

平成25年度
バンタム級　3位
上原大尊君　沖縄水産

歴代部長

初代	富原守茂		
2代	玉城実盛	12代	金城富昭
3代	漢那用全	13代	仲筋一夫
4代	具志清二	14代	糸数幸雄
5代	石原昌弘	15代	宮城政一
6代	平良親徳	16代	新垣明光
7代	城間平吉	17代	喜屋武一三六
8代	玉城利雄	18代	古波蔵喜弘
9代	平良亮	19代	大城清
10代	香村保	20代	儀間清隆
11代	宮城一郎	21代	與那嶺善道

歴代委員長

初代	幸喜良正	5代	瀬良垣世堅
2代	宮城重雄	6代	阿波連本親
3代	知名朝次	7代	島尻英明
4代	登川正広		

専門部常任委員

部長	與那嶺善道		
委員長	島尻　英明	副委員長	仲村　泰洋
総務	鶴本　寿充	登川	正広
競技運営	松門　宏行	當山	保
審判長	阿波連本親	強化	瀬良垣　世堅
広報	大城寿賀子	会計	長濱　志保

弓道専門部

専門委員長
玉　城　　辰

本県の高校弓道は今年で49年目を迎える。たった３校で始まった活動も、現在では18校に増え250人余の生徒が日々練習を行っている。

生徒は増えつつあるが、弓道場という特殊施設が必要なため、施設数の少なさが普及に困難をきたしている。そのような中、平成17年に沖縄市弓道場が新設され、さらに平成24年には奥武山弓道場も建て直された。また北部地区での部活動の新設もあり、今後の実施校の増に繋がるものと期待している。

さて、過去10年間の本県代表の全国・九州大会における上位入賞は、平成22年『美ら島総体』に向けて行った強化事業が本格的に始まることで着実に力をつけることが出来た。

残念ながら美ら島総体での上位入賞はできなかったが、平成24年『北信越かがやき総体』において、知念高校の女子団体が県勢として初優勝した。また、これまでは秋冬期に行われる九州新人、全国選抜大会では上位入賞も難しかったが、しっかりと力をつけ入賞出来るようになった。さらに、全国選抜大会において個人技能優秀者の表彰を受けた。これは、強化事業の成功と、これまで地道に指導してきた諸監督の努力の賜物である。

今後は、更なる普及とレベルアップのために高校弓道指導者の養成をおこない、他県から対戦相手として一目置かれる存在となれるよう努めたい。

平成 16 ～ 25 年のあゆみ

○平成16年度
全国高等学校弓道競技大会
　コザ高校　　男子団体４位

○平成17年度
全九州高等学校弓道競技大会
　高良（那覇西）　女子個人優勝
全国高等学校弓道競技大会
　那覇西高校　女子団体４位

○平成18年度
全国高等学校弓道選抜大会
　伊波（那商）　女子個人準優勝
　　技能優秀者

○平成19年度
全九州高等学校弓道競技大会
　宮里（那覇西）　男子個人６位
　宮國（那覇西）　女子個人４位

○平成20年度
全九州高等学校弓道競技大会
　沖縄工業高校男子団体準優勝
　金城（沖工）　男子個人優勝
　渡名喜（知念）　男子個人５位
全国高等学校弓道競技大会
　宮城（小禄）　女子個人４位
全九州高校弓道新人選手権大会
　宮野（小禄）　女子個人優勝

○平成21年度
全九州高等学校弓道競技大会
　興南高校　　男子団体３位
　奥平（小禄）女子個人２位
全国高等学校弓道競技大会
　興南高校　　男子団体５位
全九州高校弓道新人選手権大会
　興南高校　　男子団体準優勝
　小禄高校　　女子団体３位
全国高等学校弓道選抜大会
　興南高校　　男子団体３位

○平成22年度
全九州高等学校弓道競技大会
　新垣（豊見城）　男子個人４位
　安里（興南）　　６位
全九州高校弓道新人選手権大会
　奥浜（興南）　　男子個人３位

○平成23年度
全国高等学校弓道競技大会
　宮城（小禄）　男子個人７位
全九州高校弓道新人選手権大会
金城（豊見城）女子個人準優勝
全国高等学校弓道選抜大会
　伊是名（首里）　女子個人準優
　　勝技能優秀者
　内山（興南）　　６位

○平成24年度
全九州高等学校弓道競技大会
　知念高校　　女子団体３位
全国高等学校弓道競技大会
　知念高校　　女子団体優勝
　　(県勢初)
　金城（豊見城）女子個人準優勝
九州高校弓道新人選手権大会
　嘉数（豊見城）　男子個人５位

○平成25年度
全九州高等学校弓道競技大会
　コザ高校　　女子団体３位
　新城（興南）　女子個人５位
　比嘉（豊見城）　　６位
全国高等学校弓道競技大会
　玉城（知念）　女子個人５位

空手道専門部

専門委員長
村　田　理世子

昭和49年、県高校空手道専門部が沖縄県高体連に設置が認可され、同50年に全国高体連空手道専門部に加盟してから39年の歳月がたとうとしている。その間、九州・全国での活躍はめざましく、特に形競技においては、幾多の実績を残している。

そのなかでも、特に平成16年から平成25年を振り返ってみたい。この10年間は空手道のルール改正に伴う審判の育成や競技力の強化及び2010年の美ら島総体に向けて、運営面・競技面において専門部一丸となって取り組んできた特筆すべき年でもある。

○形競技

本県の形競技は九州・全国でも、上位の成績を残すお家芸である。九州大会では、個人形、団体形とも上位を独占する勢いである。しかしながら、この10年間全国総体においては、なかなか上位入賞を果たせないでいる。その背景には、競技力もさることながら、形競技のルール改正（平成18年度より）も少なからず影響していると思われる。得点制から、フラッグ制のトーナメント方式になり、美ら島総体に向けて第一指定形や、第二指定形の強化が急務となってきた。その成果もあって、平成22年本県で開催された、美ら島総体では、男子個人形において、上村拓也（興南）が優勝し、平成８年の宮國淳（宮古）の優勝以来実に14年ぶりの快挙を成し遂げた。それ以降全国では、平成22年の全国総体で仲村恵（浦添）の５位入賞が最高である。今後とも、本専門部では全国でも通用する選手の育成に力を注いでいくつもりである。

○組手競技

形競技に比べると、組手競技は九州・全国との差があったが、美ら島総体に向けて小学生から強化に取り組んできた成果もあり、近年では男女とも勝ち抜けられるように成ってきた。九州総体においては、平成16年（沖縄開催）女子団体組手において、首里高校が３位入賞。平成18年（佐賀開催）女子個人組手３位に比嘉梓（浦添）。平成23年（福岡開催）男子団体組手３位に普天間高校。平成24年（長崎開催）男子個人組手で大浦将裕（普天間）が準優勝と平成２年依頼実に22年ぶりの快挙であった。また、九州新人大会では、男子コザ・前原・女子首里・浦添・コザの３位入賞・個人組手で仲程海里（コザ）比嘉弘輝（普天間）・女子では比嘉梓（浦添）辻恵子（コザ）らが、入賞を果たし、全国選抜大会へ出場している。専門部のみならず、県内外の先生方の協力のおかげである。特に、男子団体組手で前原高校が全国高等学校空手道選抜大会（H24度和歌山）への出場を果たし、２回戦まで勝ち進んだのをきっかけに、平成25年の全国高校総体（長崎開催）では26年ぶりにベスト８入りを果たした。少しずつではあるが、組手競技においても男女とも競技力の向上がみられるので、形競技同様、九州・全国でもトップレベルになれるようより一層頑張っていきたい。

○全国高校総体連続出場校（平成 25 年現在）

浦添高等学校	28年連続出場中
首里高等学校	12年連続出場中

○全国高等学校空手道選抜大会（３月に開催）

浦添高等学校	25年連続出場達成
首里高等学校	13年連続出場中
コザ高等学校	10年連続出場中

＊全国的に県立高校の連続達成は稀である。35年まで表彰があるので是非、達成したい。

○全国高等学校選抜大会３位入賞（H16 ～ 25）

男子団体形	コザ高校3位（H16度）
	美来工科高校3位（H17度）
女子団体形	浦添高校3位（H20度）
男子個人形	仲程裕馬（コザ）2位　H18度

○歴代専門部長

山城　昌輝（S49～58）	佐久本嗣貞（S59～H2）
比嘉　定俊（H3～４）	安村　文男（H5～７）
真栄平克雄（H8～10）	神里　富次（H11～13）
津波　　清（H14～15）	伊本　盛敏（H16～18）
金城　孝忠（H19～20）	奥間　　有（H21～23）
比嘉　良徳（H24～	

○歴代専門委員長

伊良波長傑（S49～ 58）	佐久本嗣男（S59 ～ 62）
與儀善太郎（S63 ～ H4）	平田　光勇（H5 ～ 8）
新垣　信雄（H9 ～ 10）	金城　孝忠（H11 ～ 12）
比嘉　良徳（H13 ～ 17）	小松　　聡（H18 ～ 22）
村田理世子（H23 ～	
比嘉　良徳（H24 ～	

○終わりに

この10年間は2010年の美ら島総体を成功させるために、前専門委員長はじめ、多くの先生方と協力して数多くの課題に取り組み、形を残すことができた。これからも、後身の育成に力を注ぐとともに、県空手道連盟や県高体連のもと協力して空手道の普及・発展に努めていきたい。

相撲専門部

専門委員長
小　濱　　寿

平成16年
沖縄県高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　古波蔵 大輔（中農）
沖縄県高等学校新人体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　古波蔵 大輔（中農）
全九州高等学校体育大会　相撲競技
個人戦軽量級　優勝　幸地 銀治（中農）

平成17年度
沖縄県高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　幸地　銀治（中農）
沖縄県高等学校新人体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　沖縄尚学高校
個人戦　優勝　棚原　奨太（沖尚）
全九州高等学校体育大会　相撲競技
団体戦　準優勝　中部農林高校
個人戦軽量級　優勝　幸地　銀治（中農）

平成18年度
沖縄県高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　沖縄尚学高校
個人戦　優勝　橋田　拓昇（中農）
沖縄県高等学校新人体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　松川　晃士（沖尚）

平成19年度
沖縄県高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　沖縄尚学高校
個人戦　優勝　山城 翔太（沖尚）
沖縄県高等学校新人体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　沖縄尚学高校
個人戦　優勝　小橋川　泉希（沖尚）

平成20年度
沖縄県高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　山本 浩太（中農）
沖縄県高等学校新人体育大会
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　山本　浩太（中農）

平成21年度
沖縄県高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　山本 浩太（中農）

平成21年度
沖縄県高等学校新人体育大会
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　山本　浩太（中農）
全九州高等学校体育大会
個人戦計量級　優勝　和宇慶　一騎（中農）

平成22年度
沖縄県高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　福里　勇弥（中農）
沖縄県高等学校新人体育大会
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　福里　勇弥（中農）
全九州高等学校体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦重量級　優勝　山本　浩太（中農）
個人戦軽量級　優勝　和宇慶　一騎（中農）
全国高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　準優勝　中部農林高校

平成23年度
沖縄県高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　福里　勇弥（中農）
沖縄県高等学校新人体育大会
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　福里　勇弥（中農）
全九州高等学校体育大会　相撲競技
個人戦無差別級　優勝　山城　将吾（中農）

平成24年度
沖縄県高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　勝山　光王（中農）
沖縄県高等学校新人体育大会
団体戦　優勝　北部農林高校
個人戦　優勝　照喜名　清貴（北農）

平成25年度
沖縄県高等学校総合体育大会　相撲競技
団体戦　優勝　中部農林高校
個人戦　優勝　幸地　佑大（中農）
全九州高等学校体育大会
個人戦計量級　優勝　幸地　佑大（中農）

ウエイトリフティング専門部

専門委員長
宮　城　　篤

沖縄県高等学校体育連盟が60周年を迎え心よりお喜び申し上げます本専門部も昭和40年設立から現在に至りますがこの10年は「輝かしい10年」になりました。

平成16年全国総体では、94 kg級知念剛（沖縄工）がジャーク競技で日高新をマークし優勝。平成18年全国総体では、53kg級玉城成一（糸満）がジャークで日高新をマークし優勝。団体でも南部工が３位。

平成20年全国総体では、56kg級糸数陽一（豊見城）が優勝。62kg級金城誠丸（豊見城）が優勝、69kg級金城聖丸（豊見城）が両種目で日高新を樹立し優勝。団体では豊見城が優勝した。

平成21年全国総体では団体で那覇が準優勝と健闘した。平成22年全国総体は沖縄県八重瀬町で開催された。53kg級玉寄公博（南部工）がジャーク、トータルでジュニア日本新で優勝。77kg級久米大輝（南部工）が優勝。団体で南部工が優勝し大会を盛りあげた。全国女子は団体でも豊見城が初の全国優勝を果たした。

平成23年全国総体は団体で南部工は準優勝。全国女子大会では、+75kg級で金城絵里香（豊見城）がスナッチで大会新、ジャークとトータルで日高新をマークし優勝。団体でも豊見城が優勝し２連覇を果たした。平成24年全国総体は +105 kg級知念光亮（豊見城）がトータルで日本高校新記録を樹立し優勝した。平成25年全国総体は豊見城高校が大活躍。53kg級知念勇人、77kg級仲西弘一が優勝。62kg級平仲康太郎が３位入賞。105kg超級知念光亮が準優勝で５年ぶり３回目の全国優勝を果たした。この10年の沖縄県は「輝かしい10年」となった。今後競技力の維持が継続していくためには部員数を増やし早期からの強化育成が課題である。また指導者同士、質を高め合い相互協力し年間を通した強化策が大事である。関係者各位には今後ともご指導、ご鞭撻を宜しくお願いします。

歴代専門部長（平成15年～平成20年度）

14代	今井　敏彦	平成15年～平成18年
15代	識名　　昇	平成19年～平成20年
16代	金城　一男	平成21年～平成22年
17代	本成　　浩	平成23年
18代	嘉手苅良治	平成24年～

歴代専門委員長（平成15年～平成20年度）

11代	宮城　政章	平成15年～17年
12代	金城　政博	平成18年～20年
13代	宮城　政章	平成21年～23年
14代	宮城　　篤	平成24年～
18代	嘉手苅良治	平成24年～

平成22年度美ら島総体　見事団体優勝
南部工業高等学校

体操専門部

専門委員長
仲　里　正　和

平成16年度

県高校総体で体操競技男子に真和志が初出場、新体操女子団体に４校参加するなど明るい話題でのスタートとなった。一方、体操競技女子の選手減による団体選手権不参加や、新体操男子の指導者の転勤による課題もあった。全国大会では体操競技男女（興南・コザ）ともに予選敗退となり、新体操では女子団体（コザ）が42位、男子個人の西花佑貴（八重山）が28位、女子個人の山城彩（コザ）が46位となった。

平成17年度

県高校総体に体操競技男子16人、女子５人と大幅に増え大会を盛り上げた。全国大会では、男女（興南・コザ）ともに予選敗退となった。新体操の全国総体では、女子団体（コザ）が39位、男子個人の西花佑貴（八重山）が28位、女子個人の前原千佳（球陽）が46位となった。

平成18年度

本県において全九州高校体育大会が開催された。成績は、体操競技男子団体（興南）が５位で昨年より１つ順位をあげた。女子団体（コザ）が８位。新体操では男子団体（西原）が８位、女子団体（コザ）が13位、（那国際）が14位となった。全国総体では、体操競技男女団体（興南・コザ）が予選敗退。新体操では、女子団体（コザ）が43位、男子個人の金城朋也（西原）が37位、女子個人の前原千佳（球陽）が36位となった。

平成19年度

県高校総体に体操競技男子１校、新体操女子団体３校出場で、ともに１校減となる。全国総体では体操競技男女団体（興南・コザ）が予選敗退。新体操では、女子団体（コザ）が38位、男子個人の棚原悠（西原）が33位、女子個人の前原千佳（球陽）は県総体３連覇で期待されたが44位となった。

平成20年度

九州大会において体操競技男子（興南）が２年ぶりに５位となった。全国総体では、女子団体（コザ）とともに予選敗退となった。新体操では、県総体から男子が出場なし、女子団体で１校減の２校となる。全国総体では、女子団体（コザ）が41位、女子個人の木崎頌子（普天間）が47位となった。

この５年間を振り返り、体操競技の人口は男子が５人～16人、女子が２～５人。新体操では男子が０～６人、女子が25～52人となっている。全国総体の成績は、体操競技の男女ともに予選敗退、新体操においても低迷している。

平成21年度

体操競技の男子団体（興南）が九州大会において３位、女子団体（コザ）が６位となった。全国総体では男女ともに予選敗退となった。新体操では、男子の南風原が15年ぶりに出場、女子の団体は３校出場した。全国総体では、女子団体（普天間）が40位、男子個人の大濱康紀（南風原）が31位、女子個人の玉城南（普天間）が41位となった。

平成22年度

今年度は、九州高校体育大会および美ら島沖縄総体2010が本県にて開催された。体操競技男子団体（興南）が九州大会で３位、全国総体では15位となった。体操競技女子は個人の出場で、新垣まどか（コザ）が52位、大嶺聖奈（同）が65位となった。新体操では、全国総体において女子団体（普天間）が26位、同じく女子団体（コザ）が28位、男子個人の大濱康紀（南風原）が26位、喜瀬智成（同）が32位、女子個人の玉城南（普天間）が20位、松尾恵里（球陽）が25位となった。

平成23年度

体操競技男子の小浜廣仁（興南）が九州大会において県勢14年ぶりとなる個人総合優勝、団体では４位、女子個人の大嶺聖奈（コザ）が12位となった。全国総体では、男子団体（興南）が13位、個人総合で小浜廣仁（興南）が28位、種目別跳馬で７位となった。新体操では、女子団体でコザが県総体３年ぶりの優勝、全国総体で44位、個人競技では、男子の喜瀬智成（南風原）が34位、女子の松尾恵里（球陽）が44位となった。

平成24年度

県総体で体操競技男子出場が１人、女子は西原が団体初出場となったが、九州大会は辞退した。全国総体では、男子個人の真栄田義史（美里）が予選敗退。新体操では、県総体において女子個人の松尾恵里（球陽）が３連覇を果たした。全国総体では女子団体（コザ）が23位、男子個人の崎原佑史（南風原）が33位、女子の松尾恵里（球陽）が44位となった。

平成25年度

県総体では、体操競技男子１人、女子２人の出場。全国総体では男女とも予選敗退となった。新体操では、全国総体で女子団体（コザ）が34位、男子個人で前黒島智之（南風原）が27位、女子個人で冨名腰真子（球陽）が48位であった。

ラグビーフットボール専門部

専門委員長
島　袋　景　一

平成16年度

県高校総体は石川が名護を下し優勝。九州総体では両校共に初戦敗退であった。秋季大会は名護が石川を下し５年連続全国大会出場を決めた。全国大会（花園）では初戦、富良野（北海道）に圧勝、２回戦では大分舞鶴に敗れた。新人大会は石川が名護を下し優勝。九州新人大会は地元開催であったが、両校共に初戦突破はできなかった。

平成17年度

県高校総体は石川が名護を下し優勝。九州総体では共に初戦敗退であった。秋季大会は名護が石川を下し６年連続全国大会出場を決めた。全国大会（花園）では初戦、旭野（愛知）に敗れた。新人大会は名護がコザを大差で下し優勝。九州新人大会は共に初戦敗退であった。

平成18年度

県高校総体は名護が石川を下し優勝。九州総体では両校初戦敗退であった。秋季大会は名護が圧倒的な力で優勝、７年連続全国大会出場。全国大会（花園）でも初戦、山形中央に圧勝。続く２回戦も徳島の城東に圧勝。県勢初の３回戦進出、正月を花園で迎えた。３回戦は全国屈指の強豪、東福岡と対戦したが完敗した。新人大会は読谷が名護を下し優勝。九州新人大会は両校とも初戦敗退であった。

平成19年度

県高校総体は読谷が名護を下し優勝、九州総体では両校とも初戦敗退であった。秋季大会は名護が読谷を下し優勝、８年連続全国大会切符を手にする。全国大会（花園）は初戦で東京農大二に敗れた。新人大会は名護が具志川を下し優勝、九州新人大会では両校とも初戦敗退であった。

平成20年度

県高校総体名護が具志川を下し優勝、九州総体は１位ブロック出場の名護が初戦、熊本工業と対戦し、同点で抽選となり準決勝進出を決めた。準決勝は強豪の長崎北と対戦し敗れた。読谷は初戦敗退であった。秋季大会は名護が具志川に圧勝、９年連続全国大会出場を決めた。全国大会（花園）は初戦、東海大翔洋に競り勝ち、２回戦では大分舞鶴に敗れた。新人大会は名護が石川を下し優勝、九州新人大会では両校とも初戦敗退であった。

平成21年度

県高校総体は名護が具志川に大差で下し優勝、九州総体では１位ブロック出場の名護は初戦、熊本工業と引き分け、抽選で準決勝進出したが強豪長崎北に敗れ、３位となる。２位ブロック出場の具志川は初戦敗退であった。秋季大会は名護がコザを下し10年連続の全国大会出場。全国大会（花園）では初戦山形中央に競り勝ち、２回戦強豪の御所実業に善戦及ばず惜敗した。新人大会は名護がコザを下し優勝。九州新人大会では両校とも初戦敗退であった。

平成22年度

県高校総体は名護がコザを大差で下し優勝、地元開催の九州総体は名護が１位ブロック３位、コザも２位ブロック３位と好成績を残した。秋季大会は名護が宮古を下し11年連続の全国大会出場。全国大会（花園）は初戦で札幌山の手に敗れた。新人大会は名護と宜野座が両校優勝となり、抽選で１位ブロック宜野座、２位ブロック名護が九州新人大会に出場し善戦したが共に初戦敗退であった。長年、県ラグビー界を牽引してきた、名護の宮城博先生がこの年を最後に勇退した。また、名護の東恩納寛太が高校日本代表に選出された。

平成23年度

県高校総体は初の離島開催（宮古）となった。試合は名護がコザを下し優勝、地元宮古も３位と健闘した。秋季大会コザが宮古を下し優勝、12年ぶりの全国大会出場。全国大会（花園）は初戦で仙台育英に敗れた。新人大会はコザが圧倒的な力で優勝、九州新人大会では１回戦大分雄城台を撃破、準々決勝は強豪長崎北と対戦、１トライ差で惜敗。翌日、全国選抜をかけた順位決定戦も熊本西に２点差で敗れた。

平成24年度

県高校総体はコザが名護を下し優勝、九州総体はコザが準決勝で強豪東福岡と対戦し終盤追い上げたが逆転ならず３位となった。
秋季大会はコザが２年連続優勝し全国大会出場。全国大会（花園）は初戦、関商工を破るも２回戦で大阪朝鮮高に敗れた。新人大会は名護がコザを下し優勝、九州新人大会では両校初戦で敗れた。

平成25年度

県高校総体は名護がコザを下し優勝、九州総体は１位ブロック出場の名護が初戦、古豪大分舞鶴に快勝準決勝は強豪長崎南山に敗れた。２位ブロック出場のコザは初戦敗退であった。

陸上競技専門部

専門委員長
吉　永　安　二

◎組織・運営面等

全国高校総体優勝者

H16年：山城美貴（円盤投）
H20年：知念　雄（ハンマー投）
H21年：糸満みや（円盤投）
H23年：知念莉子（円盤投）
H24年：中村枝理子（円盤投）

平成16年から平成25年までの10年間を一言で言うと、全国高校総体「美ら島沖縄総体」成功に向けて取り組んだ日々であったと考えます。

美ら島総体2010を7年後に控え、常に全国を意識した組織の取組と運営が行われた期間でありました。全国大会を運営するにあたり専門部1人1人がそれぞれの役割を再認識し、組織の拡大・充実に取り組む必要がありました。特に情報処理、会計、総務、アナウンス、競技力委員等は早期に全国高校総体の視察に入り、全国レベルの大会運営の在り方を追求して取り組んできました。

また、競技審判の確保・養成については苦慮しましたが、沖縄陸上競技協会の協力と指導の下、積極的に講習会やミーティングを行った結果、各部署で共通理解が図られ、万全の体制で全国総体を迎えることができました。沖縄陸上競技協会の関係者の皆様には心から感謝申し上げます。

さらに、全国総体開催に向けては県大会以上の大会を誘致し、平成18年度全国高校総体南九州地区予選大会・平成21年度全九州高等学校新人陸上競技大会・平成22年度全国高校総体南九州地区予選大会を開催し、他にも平成20年度全九州駅伝競走大会等を開催し、本番に向けて大会運営面を組織的に取り組みました。

初めての全国的な規模の「美ら島総体2010」では多くの苦労がありましたが、なにより全国大会を実施し成功裏に終えたことは、専門部員の大きな自信・誇りとなりました。同時に、今後の組織の在り方や組織拡大について考える良い機会ともなり、改めて大きな時代の変化の中で全国高校総体の誘致にご尽力された諸先輩方と関係者の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

◎競技力向上等

ここ10年の陸上競技における競技力は飛躍的に向上しました。その実績をあげますと、全国高校総体では平成16年～25年の期間で18年度を除き毎年入賞を果たしています。その内容は全国優勝5種目。男子18種目・女子15種目で入賞を果たしました。

過去10年間の部長・委員長

年　度	部　長	委員長
平成16年	仲元　清輝	知念　信勝
平成17年	上江洲由秀	知念　信勝
平成18年～19年	上江洲由秀	久保田孝之
平成20年～21年	上江洲由秀	宮里　朝之
平成22年	知花　久則	宮里　朝之
平成23年	知花　久則	吉永　安二
平成24年～25年	座安　純一	吉永　安二

総合でも、平成16年度（島根）中部商業男子トラック8位、中部商業女子総合7位、女子フィールド優勝。平成20年度（埼玉）那覇西男子フィールド2位。平成21年度（奈良）那西女子総合4位、女子ﾄﾗｯｸ8位、女フィールド3位。平成22年度（沖縄）那覇西女子フィールド3位。平成23年度（岩手）那覇西女子総合5位、女子フィールド優勝と個人だけでなく総合に於いても全国の上位に肩を並べる競技力の向上を果たしてきています。

また、全国高校総体南九州地区予選大会では平成16年度（宮崎）中部商業女子総合優勝。平成19年度（鹿児島）那覇西男子総合優勝。平成21年度（熊本）中部商業男子総合優勝・那覇西女子総合優勝。平成22年度（沖縄）那覇西男子総合・女子総合優勝、平成25年度（熊本）那覇西男子総合優勝と過去10年以降では成し得なかった成果が出ています。

この競技力向上の背景には、離島県であるが上に厳しい状況があった選手の意識改革があったと考えます。どうしても、他県との交流が少なく大舞台に於いて充分に力の発揮が出来ない、経験不足的な厳しい状況がありました。

そのような実態の打開策となったのが、平成17年度と18年度の2年連続行われたU－18日本陸連九州ブロック強化合宿とU－18全国高等学校選抜合宿の開催があります。地元沖縄で九州や全国の合宿を間近に触れることにより、意識が高まり九州合宿や全国合宿に参加する生徒の数が飛躍的に増え、毎年のように生徒の意識が高まっていった事が競技力向上へと繋がりました。また陸上専門部が主催し11月から3月の冬季に行っている合同練習が、生徒の競技力を高めると共に、指導者の指導技術の講習の場となり指導スキルが向上している成果があります。

今後も、沖縄県の指導者・選手がお互いに協力し学校の枠を越えて向上していける環境を維持しつつ、更に飛躍していける様に各指導者が一丸となり頑張っていきたいと考えます。

テニス専門部

専門委員長
齋　藤　　憲

沖縄県高等学校体育連盟が創立60周年を迎えるにあたり、これまで本連盟の発展にご尽力されてきた歴代役員・事務局の皆さま、および渡嘉敷通之会長をはじめとする現役員・事務局の皆さまに対し、衷心よりお祝いを申し上げます。

本専門部にとって、この10年で最大のできごとは、やはり2010年度の全国高等学校総合体育大会沖縄大会の開催であったといえます。

美ら島総体テニス競技は、全国高等学校テニス選手権大会の記念すべき第100回大会に当たり、大規模な競技開会式・記念式典や、全国高体連テニス100周年のパネル展示など、先行県にない取り組みが多くありました。加えて、テニスコートが分散しているという県内特有の事情などから、会場準備や運営の面では大きな困難を強いられました。

そのような状況下でも大会を成功裏に終えることができたのは、全国高体連テニス専門部の皆さま、県高体連の役員・事務局の皆さま、県教育庁や那覇市実行委員会の皆さま、県テニス協会の皆さま、競技役員としてご参加いただいた県内の先生がたの惜しみないお力添えと、そして何よりも炎天下、選手に負けない気迫で審判を務めるなどした県内生徒補助員の皆さんの活躍があったからこそであると、今振り返って強く感じます。改めて、本専門部一同より感謝を申し上げます。

県内の競技動向に目を向けると、この10年を特徴づけるのは何と言っても沖縄尚学高校の台頭です。創部がちょうど10年前の2004年度で、以来、男子・女子ともに強豪校として圧倒的な存在感を発揮し、数々の名選手を輩出してきました。九州総体女子シングルスで2004年度準優勝・2005年度3位に輝いた井上明里選手。2006年度、全国高校総体男子ダブルス3位という過去10年の県勢最高の実績を残した金城光選手・比嘉歩選手。2007年度の1年次より、県高校総体の女子団体・個人シングルス・個人ダブルスの3冠を3年連続で成し遂げ、2008年の九州総体女子シングルスでは優勝を飾った伊波佳苗選手など。県高校総体について見れば10年のうち、男子団体で沖縄尚学が優勝を逃したのは１度だけ、女子団体も４連覇・３連覇が１度ずつの７回優勝という戦績です。ジュニアの有力選手を県外に流出させないための受け皿として大きな役割を果たしており、今後もその勢いは続きそうです。特に、今年の九州総体女子ダブルスで準優勝し、全国では２年続けてベスト16に進出した大嶺真緒選手・楚南美波選手の２年生ペア、および今年の全国総体女子シングルスで１年生ながらベスト16へ駒を進めたリュー理沙マリー選手などを擁する女子は、全国でも上位を狙うことのできる戦力を備えているといえます。

ただ他方、沖縄尚学が孤高の存在となったことで、県内では競争原理が働かない傾向が看取されます。沖縄県全体の競技力向上のためにも、近年、沖縄尚学の後塵を拝している男子の名門沖縄工業、伝統的に力のある選手が集まる女子の普天間・コザ、といった県立学校の奮起にも期待したいところです。

県内の高校テニスの全般的な傾向に言及しておきます。県の高校総体・新人大会の団体戦に出場する学校数の推移を見ると、2006年ごろを境に減少傾向にあるといえます。各校７～９名と多くの人数でエントリーする新人大会にそれが顕著であり、男子は2005年の39校から昨年度30校へ、女子は2004年の21校から昨年度13校へと、大きな落ち込みを見せています。沖縄県テニス協会などとも連係して、若年層の競技人口拡大にも取り組んでいく必要を痛感している次第です。

最後に、本専門部組織について述べさせていただきます。50周年時の第７代仲宗根勝専門委員長を引き継いで７年に渡り重責を担った第８代新垣朝也委員長が、美ら島総体の年度を最後に後進へと道を譲られました。その後は第９代喜友名徹也、第10代齊藤憲と、「復帰」後生まれが、若輩ながら専門委員長を拝命しています。これも本専門部が歴代の専門委員をはじめ多くの先生がたのご努力で長い歴史を重ねてきた証だと感じます。新採用者が減少する中で、新しい人材がなかなか増えない点に懸念がありますが、今後とも県高校生のテニス競技発展のために貢献したいと考えております。

来る2014年度には、九州総体が本県での開催となります。今夏は、審判委員長の号令の下、県内数校で審判講習会を実施し、コートに叫声を響かせて準備を進めているところです。

今後とも関係各位より、本専門部へのご指導・ご鞭撻をいただきますようお願いし、拙いご報告といたします。

ハンドボール専門部

専門委員長
仲　本　　淳

沖縄県高等学校体育連盟の創立60周年を祝い、ますます発展することを心より祈念申し上げます。60年という長きにわたり、高体連の活動に献身的にご苦労なさった諸先輩方をはじめ関係各位に敬意を表します。

本県ハンドール専門部は、昭和40年に第1回大会を開催し、男子代表興南高等学校が熊本インターハイに初参加し、ベスト16という成績を残しています。また、昭和43年には、沖縄教員ハンドボールチームが発足し、沖縄県の競技力向上のために、自己負担で九州大会にも参加したと聞いております。現在の競技力の高さも、諸先輩方のご苦労と、ご努力の賜だと感謝申し上げます。

現在ハンドボール専門部はマンパワーが充実しております。特に、平成22年に行われた美ら島総体に向けた取り組みがきっかけで県内の大会はもとより、九州大会においてもその経験が活かされ、スムーズな運営が続いている状況です。競技力もめざましい成績を九州・全国大会で収めています。ここ10年間を振り返ってみても全九州大会において、男子興南高等学校が平成17年、21年、22年、23年と計4回の優勝、女子は陽明高等学校が平成17年、那覇西高等学校が平成20年、22年、23年、24年、25年と計6回、合計10回の九州優勝を勝ち取っています。全国大会においても男子は興南高等学校が平成17年、18年、21年、25年と計4回の優勝を勝ち取っています。また、U-16日本代表、U-19日本代表などにも多くの選手を輩出してきました。これも小学校チームの増加と全国トップレベルの競技力を中学校も引き継ぎ、それ以上の競技力を向上させて高校に送っていることが一因に挙げられます。また、大学や実業団などで活躍した選手が本県に戻り指導者として活躍していることも見逃すことはできません。本県代表チームの活躍としては他にも全国選抜大会において男子は興南高等学校が平16年、17年の優勝と平成21年の準優勝、女子は浦添高等学校が平成16年の準優勝、陽明高等学校が平成17年の優勝と活躍をしています。国民体育大会においては少年男子が平成17年、23年の優勝と活躍をしています。この10年間の活躍は本県のハンドボールのレベルの高さを証明するには充分すぎる活躍であり、選手のみならず小学校、中学校の指導者や保護者の努力や支援のお陰だと感謝しています。

これからも、多くのご指導・ご助言を仰ぐとともに、高体連ハンドボール専門部も一層の努力を重ねながら、小学校・中学校、県協会の方々とも連携して、新たなる日本一をめざして頑張っていきたいと考えております。

	男　子		女　子	
H16	那覇西	2回戦	浦　添	ベスト8
H17	興　南	優　勝	陽　明	準優勝
H18	興　南	優　勝	陽　明	3回戦
H19	興　南	2回戦	陽　明	ベスト8
H20	興　南	準優勝	那覇西	準優勝
H21	興　南	優　勝	陽　明	2回戦
H22	興　南	ベスト8	那覇西	2回戦
H23	興　南	ベスト8	那覇西	ベスト8
H24	興　南	準優勝	陽　明	2回戦
H25	興　南	優　勝	那覇西	2回戦
	優勝4回	準優勝2回		準優勝2回

レスリング専門部

専門委員長
伊　計　孫　実

沖縄県高等学校体育連盟の創立60周年を祝い、ますます発展することを心より祈念申し上げます。60年という長きにわたって、高体連の活動に献身的に御苦労なさった諸先輩方をはじめ関係各位に甚大なる敬意を表します。

本県レスリング専門部は昭和54年に正式に承認され35年の歳月を迎えます。設立当時、上原泰守先生（当時、北部農林高校）からスタート。読谷高校、南部農林高校、沖縄高校が県高校総体に参加し、第２回レスリング大会が北部農林高校で開催。

60周年をむかえるにあたり、美ら島沖縄総体を挟みここ10年間でのレスリング専門部の努力が実り競技実績は大きく発展した。10年前に競技底辺拡大を図り少年少女の部を設立。美ら島沖縄総体への強化も含め専門部の先生方が小中高の一貫指導をおこなった。ちゅら島総体では県勢初となる学校対抗戦３位、個人戦においても24年ぶりなる全国総体チャンピオンが出た。その後、全国個人優勝者はもちろんのこと、日本代表を何名も輩出。23年度全国選抜大会で学校対抗戦で念願であった全国制覇。今年度は屋比久翔平（浦添工卒―日体大）がジュニア世界選手権で銅メダルを獲得し成果をあげている。

<専門部10年間のあゆみ>

平成16年度：美ら島沖縄総体へ向け、専門部先生方の努力により少年少女レスリングを設立。

平成17年度：全国総体（千葉県）で北部農林高校が学校対抗戦で県勢初となるベスト８に入る。

平成18年度：浦添工業高校、南部農林高校が学校対抗戦に初出場。

平成19年度：JOC九州大会で96kg級の赤嶺希（浦工）が県勢初の優勝を果たす。

平成20年度：96kg級の赤嶺希（浦添工）が全日本JOC大会で県勢初となる全国制覇の快挙を成し遂げアジア大会へ日本代表として出場した。

平成21年度：全日本JOC大会で46kg級の友寄大輝、50kg級の石新一早（北農）が全国制覇。また50kg級の金城希龍（浦工）が３位。アジア大会へ日本代表で出場。県総体の学校対抗戦で浦添工業が初優勝。

平成22年度：美ら島沖縄総体で浦添工業高校が県勢初となる学校対抗戦３位入賞をはたした。八重山高校が地元大会出場で大会を盛り上げた。九州大会において浦添工業が学校対抗戦で県勢初の優勝をはたした。

平成23年度：浦添工業高校が歴史的快挙を成し遂げた。全国選抜大会で学校対抗戦優勝という偉業である。九州勢でも昭和53年の鹿児島商工以来で九州はもちろん全国の関係者により多くの祝詞をうけた。個人戦においても与那覇の５冠、屋比久３冠、志喜屋２冠。100kg級の宮國雄太（浦工）がカデットアジア大会で銅メダル獲得。

平成24年度：84kg級 与那覇竜太（浦工）が全国総体２連覇、国体２連覇、全国グレコ３連覇、ＪＯＣ優勝を合わせると高校三年間で９冠の偉業を達成した。66kg級　屋比久翔平（浦工）も全国総体は惜しくも優勝を逃したが、この年４冠（ＪＯＣ、全国選抜、国体、全国グレコ）高校三年間で６冠を達成。

平成25年度：屋比久翔平（浦添工卒―日体大）が県選手では初となるジュニア世界選手権で銅メダルを獲得。

平成23年、浦工、全国選抜大会団体優勝（上）
Ｊｒ世界選手権（ブルガリア）で屋比久が銅メダル

水泳専門部

専門委員長
金　城　　充

この10年間は、「美ら島沖縄総体 2010」がメインイベントとして存在しており、競技面も運営面もそこに向けて進んでいく印象であった。

平成15年度。男子で唯一九州大会決勝に進出し、全国大会出場も果たした大城翔（那覇１年）が競泳で活躍。水球は着実に強化を進め、末弘杯九州大会において後の日本代表となる那覇商業２年生の伊禮寛が優秀選手に選出された。U-16カデットクラス全日本強化選手に那覇商業の与那原祥（１年）が指定されたのも大きな成果であった。

平成16年度。競泳では推薦枠を使わずに4名の選手が実力で出場。これ以降実力で全国大会に出場できる選手が続いて出てくるようになる。水球は那覇商業高校の黄金期。九州では連盟の大会を含め５大会中３大会で優勝、２大会で準優勝を果たす。

平成17年度。和田真理子（糸満）の九州２種目優勝、大嶺秀太郎（那覇西）、山元孔暁（糸満）の九州上位入賞など新1年生の活躍が目立った。

平成18年度。岩﨑翔平（普天間）の活躍。全国総体でも順調に記録を伸ばした。

平成19年度。全国総体に個人で６名出場も上位入賞ならず。水球は那覇商業に加え陽明高校が九州総体に出場。その後の水球競技拡大のきっかけとなった。

平成20年度。競泳・水球とも苦境の年。競泳は九州総体決勝進出が1名のみ。全国総体も推薦枠での　出場となった。水球も決勝トーナメントまでは進出するものの３位入賞が壁となった。

平成21年度。昨年から一転、実力で5名の選手が全国総体出場を果たす。しかし上位進出はならず。水球は九州ベスト４、国体にも出場し、22年ぶりの入賞（７位）を果たした。

平成22年度。すべてが美ら島総体にむけて動いた1年だった。選手も数年来の強化合宿を経て、全国の舞台に挑んでいった。水球競技はベスト８をはたし、新聞紙面をにぎわせてくれた。競泳競技では上位入賞も期待され、選手たちは全力で戦ったが残念ながら「もうひと伸び」が足りず、涙を呑む結果となった。それらの選手たちは「地元開催」の期待の大きさに戸惑った面もあったようで、強化と同時に精神面のケア・強化にも力を注ぐべきであったとも思われる。当然、中にはこの大舞台で自己記録を更新する選手もおり、それぞれの「夢舞台」はそれぞれの形で終わった。

平成23年度は全国総体に男子50m自由形で開邦高校３年の関谷斗武、男子200mバタフライで糸満高校１年の内山和昭、女子400m個人メドレーで普天間高校２年田中瑞穂が出場した。久しぶりに全国総体で普天間高校２年田中瑞穂が400m個人メドレーで決勝に残り７位入賞を果たした。水球では九州大会で予選リーグを突破するものの、全国総体の出場権は得られなかった。

平成24年度は全国総体に男子200m個人メドレーで那覇国際高校２年の藤誠、男子200mバタフライで糸満高校２年の内山和昭、男子200m・100m平泳ぎで糸満高校２年の伊敷竜治、女子400m自由形で那覇西高校３年の前田千慧、女子200m・400m個人メドレーに普天間高校3年の田中瑞穂、女子400mリレーに那覇西高校（宮城沙耶子・千桜子・前田千慧・比嘉未香子）が出場した。普天間高校3年の田中瑞穂が400m個人メドレーで県内初の表彰台に登り、３位という素晴らしい成績を収めた。水球では那覇西高校が参加し2年ぶりに2チームが九州総体に参加した。結果は残念ながら予選敗退。

平成 25 年度は全国総体に男子 200 m個人メドレーで那覇国際高校３年の藤誠、男子 200m・100m バタフライに糸満高校３年の内山和昭、男子 200m・100m 平泳ぎに伊敷竜治、男子 400m メドレーリレーに糸満高校（伊敷竜太・伊敷竜治・内山和昭・冨名腰和真）、女子 200m 個人メドレーに那覇高校３年の知念七星が出場した。糸満高校３年の伊敷竜治が 100m 平泳ぎで決勝に残り、８位入賞を果たした。

水球は那覇商・那覇西ともに全国大会出場はならなかった。

平成22年度の美ら島総体をきっかけに飛び込みの活動が再開した。平成23年度には高校3年生の選手もいたが、未だ練習不足もあって総体には出場しなかった。現在ジュニアの選手が継続的に続けているので、近い将来飛び込みでの参加も期待できる。

ここ10年の専門委員長

平成12年度～平成22年度	佐藤　新
平成23年度～現在	金城　充

なぎなた専門部

専門委員長
瀬　長　睦　子

沖縄県高等学校体育連盟創立60周年を迎えるにあたり、心からお喜び申し上げます。

本専門部は、昭和57年、海邦国体開催決定日前に準専門部として県高体連の特別な配慮のもと発足、翌年専門部に昇格しました。発足以来、県高体連、県なぎなた連盟をはじめとする諸先輩方の物心両面からの大きな援助を頂き、本専門部も少人数ではありますが、31年目を迎える事ができました。本当にありがとうございました。

この10年間を振り返ると、平成22年に本県で開催された全国高校総体（美ら島総体）に向けての日々であったようにも思われます。

平成16年に、県なぎなた連盟主催で全国トップの熊本西高校の監督一川治子先生を招聘して指導者講習会が開催されました。また、全国高校総体選手育成の一環とし、小学４～６年生を対象とした強化練習会も実施されました。平成18年には、平成22年度全国高校総体（美ら島総体）の本県開催が正式決定され、指導者講習会、強化練習会はもちろんのこと、小・中学生の指導者と本専門部員との連絡協議会を開催し、指導者間の連携と意識の高揚に努めました。平成20年の埼玉総体では、強化練習会等の取組の成果が発揮され、演技競技において屋嘉比・座喜味ペア（西原３年）米須・城間ペア（知念１年）が３位に入賞しました。また、大会運営に欠かせない役員の確保・養成等が始まりました。平成21年には、次年度のリハーサルを兼ね九州大会を本県で開催しました。本専門部の部員が少ない分、本県代表チームの監督もまた、大会準備に追われる状況の中で、選手達が大活躍し、団体試合の部で初優勝（知念）、演技競技で準優勝（知念）という好成績を残してくれました。続く、近畿まほろば総体においても、演技競技において昨年度、１年生ペアながら３位入賞した、米須・城間ペア（知念）が５年ぶりに全国制覇を成し遂げました。県内大会においても、強化指定校を中心に競技力は拮抗し、各大会においてもレベルの高い試合展開がなされ、美ら島総体に向けて選手一人一人の意識が高まっているのが感じられました。また、美ら島総体の大会運営に向けても那覇市実行委員会の協力の下、諸準備がスタートしました。厳しい財政状況の中ではありますが、予算面において那覇市の協力を得ることができ、会場等の施設も決定しました。残すところは、大会運営にあたる役員の確保と、一人一役活動の補助員の育成等のソフト面の充実にありました。平成22年、美ら島総体本番を迎えました。施設面においては、沖縄県立武道館を会場に近隣の学校の体育館を練習会場として使用させて頂き、非常に恵まれたものとなりました。しかし、当初からの課題であった役員・補助員の確保は、大会が平日開催という厳しい日程が大きな壁となりました。そんな苦境に力を貸して下さったのが、海邦国体以来なぎなた競技を支えて下さっている県連盟の先生方や大学生、退職した高体連ＯＧの先生方、さらには那覇市実行委員会や幼小中高から集まった先生方でした。そして、一人一役活動で頑張ってくれた高校生の力でもありました。その想いに、応えるかのように、本県選手団は大活躍、23年ぶりの団体試合優勝を始め、演技１位２位・個人試合２位、それだけではなく出場した本県選手が、全ての種目で入賞するというこの上ない素晴らしい成績を残してくれました。これもひとえにご協力頂いた皆様のご尽力の賜物であり、心よりお礼を申し上げます。

その後も、先輩達の勇姿に奮起した後輩達が、頑張り平成23年北東北総体で知念高校が団体試合３位、演技３位、個人試合３位に入賞し、平成24年北信越かがやき総体では、沖縄尚学高が団体３位、知念高校が演技で５位に入賞しました。平成25年北部九州総体では、知念高が団体試合３位、演技２位、個人試合５位、沖縄尚学高が演技３位に入賞しました。

現状としては、たくさんの方々のお力添えを頂き、なんとか全国大会でも入賞することができています。しかし、部員の減少・指導者不足等の大きな課題もあります。

「部活動の活性化・なぎなた競技の普及」はその成果を一朝一夕に成し遂げることが難しい課題ではありますが、競技力の向上を図る上でも底辺を拡大させることは必須の条件であり、関係諸機関と連携を図りながら長期的な視野に立ったなぎなた競技の「普及」に向けた対策を講じ、より具体的な取り組みをスタートさせたいと思案しています。

なぎなた専門部へのさらなるご支援・ご協力をお願い申し上げ、終わりにしたいと思います。

アーチェリー専門部

専門委員長
安谷屋　　仁

沖縄県高等学校体育連盟創立60周年を迎え、お祝いを申し上げるとともに、これまで各競技において数多くの功績を挙げたこと、誠におめでとうございます。

アーチェリー専門部が昭和60年県高体連への加盟が承認されて、29年目を迎えました。ここ10年間の歩みについて振り返ります。

平成17年は全国高校総体で昨年度の男子30位が45位へ、女子も37位が42位へと大きく後退しました。平成18年は希望が見え始めました。全国高校総体では昨年の45位から28位まで上がりました。九州新人大会の50M30Mラウンドで仲本博貴（宜野湾）が638点の好記録で第４位につけました。女子も３人が500点を超えました。

平成19年、仲本博貴が３月の全国選抜大会で1234点の好記録で6位入賞し、全日本ジュニアチーム入りを果たしました。全国高校総体の男子団体宜野湾高校は26位で決勝進出はなりませんでしたが、仲本選手は大会記録にあと１点という好記録で決勝トーナメントに進みました。仲本選手は全国上位選手が参加する第4回つま恋カップで優勝するなど大いに湧いた年でした。平成20年、全国高校総体で男子団体は42位と逆戻り、女子は34位と頑張りました。仲尾彩（宜野湾）がただ1人予選を突破して決勝トーナメントに進みましたが、優勝した図師選手（山陽高）に１回戦で敗れて49位に終わりました。仲尾選手は九州大会でも３回戦まで進出し７位と頑張りました。

県高校新人大会では30mダブルで新垣栄悟（宜野湾）が640点、50m30mラウンドでは源古友樹（宜野湾）が625点好記録で優勝し、仲尾選手は九州新人大会で５位入賞しました。県高校選手権大会では1100点を超える選手が３人に増えるなどレベルが向上してきました。

そして平成22年「青天届く君の風　みなぎる闘志が夏に輝く」のスローガンのもと、８月１日から４日までの４日間の日程で平成22年度全国高等学校総合体育大会アーチェリー大会　高円宮賜牌　第43回全国高等学校アーチェリー選手権大会が、全国各地から男子91校234名、女子85校206名の選手を宜野湾市「宜野湾海浜公園」に迎え、開催されました。

本番１週間前から始めた競技場の設営は時折、豪雨に見舞われ、本番を目の前にして不安がよぎる中での作業となりました。しかし、その不安をよそに、大会期間中は、雨・落雷等による競技の中断もなく、順調に競技が進行できました。残念ながら団体男子に出場した宜野湾は予選32位、団体女子は不参加、男女の個人戦も全選手が予選落ちという競技力に関しては課題の残る大会となりました。しかし、大変多くの方々にご協力をいただき、大会が成功裏に終了することができましたことに心から感謝申し上げます。

ここ数年は部員の減少に加えて、競技力の低下が目立ち、九州・全国総体での上位入賞者は皆無なのが現状です。よって、全国総体での予選通過が当面の目標として挙げられます。

また、専門部が高体連へ加盟して、長期間にわたり委員長をされてこられた島袋盛範先生が平成19年度をもって退職されました。専門部員が少なく、後継者づくりが大きな課題として残る中、専門部を存続、または盛り上げるために精一杯努力していこうと決意する節目にきています。そのためには諸関係機関からのご協力やご指導をお願い申し上げるとともに、専門部発展のため一生懸命頑張っていく所存であります。

歴代専門部長

當山　安信（昭和60年～平成元年）
大城　正英（平成２年）
高里　良春（平成３年～平成４年）
嘉数徳一郎（平成５年～平成６年）
比嘉　徳正（平成７年）
新川善一郎（平成８年）
新里　勝谷（平成９年～平成12年）
島尻　浩希（平成13年～平成14年）
新垣　　健（平成15年～平成16年）
神元　正勝（平成17年～平成19年）
真栄田盛夫（平成20年）
渡口　　恵（平成21年～平成23年）
當眞　　武（平成24年～）

歴代専門委員長

島袋　盛範（昭和60年～平成19年）
比嘉由紀子（平成20年）
安谷屋　仁（平成21年～）

自転車専門部

専門委員長
島　田　芳　之

1．はじめに

沖縄県高等学校体育連盟創立60周年おめでとうございます。同連盟に所属する立場でありながらも、先人たちが築きあげた年数に敬意を表します。長きに渡り、高校生の健全育成及び生涯教育に寄与してきたことに、感服です。

この10年の思い出は、何といっても、2010年の全国高等学校総合体育大会「美ら島沖縄総体」です。

事前から、高校生の可能性に光があてられ、本番の時のマスコミ各社の報道。何よりも各大会会場の盛り上がりは、県民を挙げての盛り上がりでした。

今年、2020年の東京オリンピックが決まりましたが、その盛り上がりは、インターハイとは、比べものにならないでしょうが、それに向けて、選手の育成に携わらないといけないのが、高体連ではないでしょうか。さらなる、10年に向けて、本連盟の活動は、そのスタートにもなるのでしょう。我々、自転車競技専門部も若輩ものながら、その一旦でも、担えればと思います。

2．自転車競技専門部の10年のトピックス

①2004（平成16）年

卒業後の現在でも活躍している内間康平（北中城）が１年生ながら、県大会ロードを制し、鮮烈なデビューを飾る。

②2005（平成17）年

強化合宿の充実をはかり、実業団チームとの走行会などを開催。

③2006（平成18）年

全国総体において、内間康平（北中城）がロード競技にて、県勢初の優勝。ポイントレースでも２位。前川剛大（北谷）がケイリンで７位入賞。

④2007（平成19）年

全国総体において、前川剛大（北谷）がケイリンで４位入賞。秋田国体において、新垣朋洋（北中城）が４ｋｍ速度競走で、８位入賞。

⑤2008（平成20）年

全国総体において、伊波直人（北中城）がスクラッチで３位入賞。九州大会では、ロードレース、スクラッチともに優勝。

⑥2009（平成21）年

全国総体において、松田士生心（北中城）がケイリンで５位入賞。九州大会では、伊波直人（北中城）がポイントレースで優勝。スプリントでは、４位までに県勢が３名。波平敏弥、安里優太、松田士生心（ともに北中城）が２、３、４位入賞。

⑦2010（平成22）年

競技場の改修が同年１月に終わり、こけら落としで、２月に九州地域大会（連盟主管）、６月に全九州高校大会、７月に全国高校総体本番を迎える。ハードな年となった。

全九州高校大会においては、県勢初の学校対抗成績で総合優勝を北中城高校が飾る。安里優太（北中城）が１㎞タイムトライアル、スプリントで二冠。高良和郎（北中城）が４㎞速度競走で優勝。チームスプリントでも北中城が優勝。その他、波平敏弥、湯川仁一、島袋大地、城田大和らが各種目で入賞を果たし、学校対抗総合優勝を支えた。また、もう一つの強化指定校である美来工科高校もチームパーシュートで５位入賞や、古川卓也、横田潤、島袋開州、照屋貴己が各参加種目で入賞を果たす。

その勢いで、地元開催の美ら島総体へ臨んだが、警備等の関係で、競技場が使用できないことも多く、地元の利を生かせない状況であった、そんな中、城田大和（北中城）が、ロードレース、スクラッチで８位入賞を果たす。

⑧2011（平成23）年

飛躍を続けなければいけない年だが、九州において城田大和、島袋大地（北中城）が入賞するにとどまった。

⑨2012（平成24）年

美ら島沖縄総体での強化指定校の関係で、縮小していた学校数が、徐々に復活を果たしてきた。高体連主催の大会では、結果は芳しくなかったが、高校生の参加できる日本唯一のステージレース、「全日本ステージレースｉｎいわて」で、城田大和（北中城）が県勢初の総合優勝を飾る。その勢いで、岐阜国体においてもロードレースで２位。参考までに、新城幸也が県内自転車界初のオリンピック出場を果たした。

⑩2013（平成25）年

特筆すべき点は、加盟校数が14校と加盟校数で、全国で最も多い都道府県となった。九州大会への参加校も10校と多い年になった。そんな中、伊藝大智（北中城）が、スクラッチで優勝。照屋将貴（北中城）、新城雄大（八重山農林）がそれぞれの種目で入賞を果たす。

高体連主催以外でも、「全日本ステージレースｉｎいわて」で成海大地（普天間）が総合４位。東京国体では、照屋将貴（北中城）、新城雄大（八重山農林）で入賞を果たす。

カヌー専門部

専門委員長
仲　西　　潤

沖縄県高等学校体育連盟の創立60周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。

本専門部も平成元年の準加盟から始まり、今年で25年目を迎えました。この四半世紀の間に、沖縄県高等学校体育連盟をはじめ、沖縄県カヌー協会や多くの関係者のご支援のおかげで多くの全国チャンピオンを輩出し、全国に対してもカヌー王国沖縄を強く印象付けるまでになりました。沖縄県のカヌー競技の発展に寄与された諸先輩方並びに関係者諸氏に深く感謝しながら、カヌー専門部の10年間を振り返って紹介させていただきます。

平成14年に全国高等学校体育連盟へ加盟したカヌー競技は、平成18年に初めて全国高等学校総合体育大会で競技が開催されました。この年には沖縄水産高校の大城辰元君がカナディアンシングルの500mと200mで３位に入賞し、カナディアンペアの200mでは大城辰元・新垣貴大ペアが３位入賞を果たしています。大城君は平成17年と18年の２年連続で全日本ジュニアの代表に選ばれました。

平成19年の佐賀総体では沖縄水産高校の戸塚朝太君がカナディアンシングルの500mと200mで４位に入賞しました。

平成20年の埼玉総体では沖縄水産高校の戸塚朝太君がカナディアンシングルの200mで７位、松川憲次郎・大城海ペアがカヤックペアの200mで７位に入賞しました。

平成21年に京都で開催された全国総体では一人も決勝に進出することができず、次年度の美ら島総体に向けて不安を残す結果となりました。

しかし、平成22年に開催された美ら島総体では、着実な選手強化の成果が結果としてあらわれました。カナディアンシングルの500mで沖縄水産高校の當銘孝仁君が優勝、大城海輝君が３位に入賞し、表彰台を沖縄一色に染めました。同200mでも當銘君が３位、大城君が４位に入賞し、當銘・大城ペアで出場したカナディアンペアでは500mで２位、200mで２位に入賞しました。悲願だった沖縄での全国総体で沖縄県のカヌー競技のレベルの高さを広く知らしめることができました。また、當銘君と大城君はともに全日本ジュニアの代表に選出されました。

平成23年に宮城県で開催された全国総体では、県勢選手が美ら島総体の熱気冷めやらぬ活躍を見せてくれました。沖縄水産高校の大城海輝君がカナディアンシングルの500mと200mで優勝し、県勢初の２冠を達成しました。

平成24年に石川県で開催された全国総体では、沖縄水産高校の大城就一・仲宗根脩真ペアがカナディアンペアの500mと200mで優勝し、２年生で全国大会２冠という快挙を成し遂げました。カナディアンシングルでは沖縄水産高校の大仲雅人君が500mで４位、200mで６位に入賞しました。さらに、沖縄県勢として初めて出場したカナディアンフォアでは、大城就一・仲宗根脩真・大仲雅人・末吉集人の沖縄水産高校が500mで２位、200mで３位に入賞しました。この大会では男子総合でも沖縄水産高校が３位に入賞しており、沖縄県におけるカヌー競技の普及と競技力向上が実感できる年となりました。また、大城君と仲宗根君は全日本ジュニアの代表に選出されました。

平成25年は大分県で開幕した全国総体で、昨年に引き続き沖縄水産高校の選手が活躍を見せました。大城就一・仲宗根脩真ペアが昨年に続きカナディアンペアの500mと200mで優勝し、２年連続での２冠を達成しました。カナディアンシングルでは大仲雅人君が200mで５位に入賞しました。昨年の悔しい思いを胸に出場したカナディアンフォアでは、大城就一・仲宗根脩真・大仲雅人・末吉集人の沖縄水産高校が500mで５位、200mでは念願の優勝を果たしました。さらに、カヤック勢も沖縄水産高校の比嘉宣友君が５位に入賞する活躍を見せました。

この10年間で、沖縄県高校生のカヌー競技は素晴らしい活躍を見せ、カヌー王国沖縄を築いてくれました。しかし、参加校の減少や女子選手の育成など、課題はまだ多くあります。カヌー専門部としても県カヌー協会や関係者の皆様のご指導、ご協力をいただきながら、今後のカヌー競技の発展・向上に努めてまいりたいと思います。

<専門部長>

野村重明（平成14年～16年）
前原新吉（平成17年～18年）
新崎直昌（平成19年）
高山朝夫（平成20年）
川満雅夫（平成21年～現在）

＜専門委員長＞

上原　信（平成16年～平成22年）
仲西　潤（平成23年～現在）

ボート専門部

専門委員長
一　島　雅　士

私が専門委員長に就任して３年目の本年に高体連60周年を迎えるのはとても名誉なことであり喜ばしく思います。

まず始めに、どのような学校がボート競技に取り組んでいるのかを知っていただくために、県内で行われた主要大会の過去3年間の総合結果を載せてみます。

◆平成22年度

・県総体　男子総合優勝　美里工業高
　　女子総合優勝　コザ高校
・県新人　男子総合優勝　美里工業高
　　女子総合優勝　辺土名高校

◆平成23年度◆

・県総体　男子総合優勝　美里工業高
　　女子総合優勝　辺土名高校
・県新人　男子総合優勝　辺土名高校
　　女子総合優勝　辺土名高校

◆平成24年度

・県総体　男子総合優勝　辺土名高校
　　女子総合優勝　辺土名高校
・県新人　男子総合優勝　辺土名高校
　　女子総合優勝　辺土名高校

◆平成25年度

・県総体　男子総合優勝　辺土名高校
　　女子総合優勝　該当校なし

以上のように、ここ数年は辺土名、コザ、美里工業の３校が中心となって活動しています。しかし、少ないながらも『美ら島沖縄総体』をきっかけとし全国で戦えるまでの実力を備えることができました。

コザ8位 心一つ

女子舵手つきクォドルプル

こん身の力 5人充実

［平成22年8月11日沖縄タイムス朝刊］

菅原8位 夢結実

快挙 4県勢が準決進出

男子スカル単

ハイライト

悔しさバネ 成長重ね

［平成22年8月11日沖縄タイムス朝刊］

これまで他県における大会では、予選を通過するのも困難な状況であり、たとえ予選通過を果たしても全く勝負にならないほど実力の差がありました。

しかし、上図の２クルー（女子クォードルプル：コザ高、男子シングルスカル：菅原［辺土名高］）は予選突破どころか、８位入賞という快挙を成し遂げました。それに他２クルーが準決勝進出を果たし、これまで弱いとされていた沖縄県のイメージを払拭するには十分なアピールとなりました。これも、高体連が中心となってサポートしてくれたおかげだと今での感謝の念が絶えません。

この頑張りをきっかけとして、その後U19世界ジュニア選手権の選考会出場権を３年連続（辺土名高）で得るほどになり、県外大会でも予選突破どころか決勝を狙える位置まで成長しました。現に、昨年の新潟総体では女子シングルスカルにおいて、平良里佳（辺土名高）が九州勢で唯一準決勝まで勝ち進みました。

どの校も年を経る事に着実に実力をつけてきていたのですが、３年前襲来した台風によって桟橋が大きな被害に遭い中部地区の主練習場であった泡瀬水域が使用困難な状況となりました。選手は存在するのですが、まともに艇に乗れないため、これまでの盛り上がりがしぼみ始め、県内のボート競技自体が存続の危機にあります。過去に築いてきた輝かしい歴史を風化させないためにも、専門部として力の限り取り組んでいきます。今後も、応援よろしくお願いします。

フェンシング専門部

専門委員長
竹　島　恵美子

フェンシング専門部は平成７年に高体連に加盟し、今年で19年目を迎える。加盟から平成15年まで９年間に渡り上里弘美先生が専門委員長を務めてきた。平成16年からは知念豊孝先生が引継ぎ、平成23年までの８年間、委員長を務めた。その後、平成24年から私が引継ぎ、周りの指導助言をいただきながらどうにか今年で２年目を迎えている。

この10年間で最も記憶に残る大会といえば、やはり平成22年に本県で開催された「美ら島総体2010」である。「美ら島総体」に向け、数年前から選手の強化を図り、毎年、県外から元オリンピック選手や全日本ジュニアコーチの招聘等、選手の競技力向上に努めた。また、本県の一番の課題である、県外試合経験が少ないというハンディ克服のため、九州合同強化合宿、西日本大会への出場等、可能な限り県外試合等への参加し、経験不足を補ってきた。

平成22年「美ら島総体」では、個人女子サーブルのベスト16が最高記録で、思うような結果を残すことができなかったのは残念である。

しかし、翌年の平成23年の九州選抜大会では、女子の宜野座高校が強豪の九州勢と接戦の末、見事３位に入賞。全国選抜大会への出場権を勝ち取り、18年ぶりに全国選抜への出場を果たした。

フェンシング専門部の課題は、「美ら島総体」後、高校総体、新人大会においての参加チーム数、選手数の減少傾向である。今後は競技の普及・選手の確保に努め、全国・九州大会において上位入賞を目指し、競技力の向上に努めたい。

平成16年度
県高校総体　男子　宜野座高校（初優勝）
　　女子　石川高校（８連覇）
新人大会　男子　石川高校
　　女子　宜野座高校（初優勝）

平成17年度
県高校総体　男子　宜野座高校
　　女子　宜野座高校（初優勝）
全九州高等学校体育大会
　個人女子エペ（宜野座）知名ゆい子（ベスト４）
新人大会　男子　沖縄工業高校
　　女子　宜野座高校

平成18年度
県高校総体　男子　石川高校
　　女子　宜野座高校
新人大会　男子　沖縄工業高校
　　女子　宜野座高校

平成19年度
県高校総体　男子　沖縄工業高校
　　女子　宜野座高校
新人大会　男子　美里工業高校
　　女子　宜野座高校

平成20年度
県高校総体　男子　美里工業高校
　　女子　宜野座高校
新人大会　男子　美里工業高校
　　女子　宜野座高校

平成21年度
県高校総体　男子　美里工業高校
　　女子　宜野座高校
新人大会　男子　美里工業高校
　　女子　宜野座高校

平成22年度
県高校総体　男子　美里工業高校
　　女子　宜野座高校
全国高校総体「美ら島沖縄総体2010」
　個人女子サーブル
　　宮城ひろの（宜野座）ベスト16
新人大会　男子　石川高校
　　女子　宜野座高校

平成23年度
県高校総体　男子　沖縄工業高校
　　女子　宜野座高校
全九州高等学校体育大会
　個人女子エペ（宜野座）山城みなみ（ベスト４）
新人大会　男子　沖縄工業高校
　　女子　宜野座高校
九州選抜大会　女子　宜野座高校　３位
全国選抜大会　出場

平成24年度
県高校総体　男子　沖縄工業高校
　　女子　宜野座高校
新人大会　男子　沖縄工業高校（２連覇）
　　女子　宜野座高校（９連覇）

平成25年度
県高校総体　男子　沖縄工業（３連覇）
　　女子　宜野座高校（９連覇）

ゴルフ専門部

専門委員長

渡久地　正　博

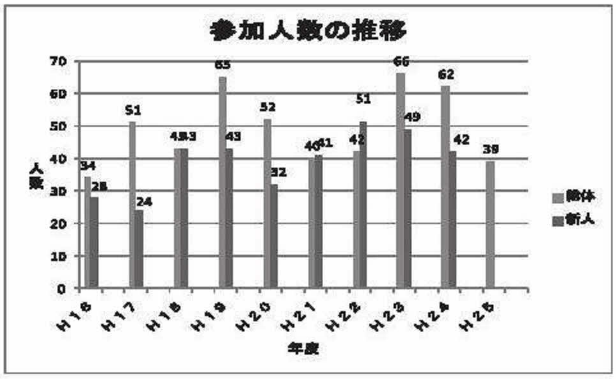
沖縄県高等学校体育連盟創立60周年おめでとうございます。

我々、ゴルフ専門部は平成12年度に12名の少人数から競技をスタートし、今年で14年目を迎えることになりました。

これも一重に高体連事務局及び関係各位のお陰だと思っております。本当にありがとうございます。ここで、これまでの専門部としての歩みを紹介致します。

参加校、参加人数の推移【平成16年～平成25年まで】

		総体			新人		
		参加校	参加人数	計	参加校	参加人数	計
H16	男	15	29	34	13	24	28
	女	4	5		3	4	
H17	男	19	41	51	10	17	24
	女	6	10		5	7	
H18	男	16	34	43	15	35	43
	女	4	9		3	8	
H19	男	17	55	65	14	34	43
	女	4	10		6	9	
H20	男	18	40	52	12	23	32
	女	6	12		6	9	
H21	男	14	31	40	14	34	41
	女	6	9		7	7	
H22	男	11	30	42	11	39	51
	女	10	12		6	12	
H23	男	15	46	66	15	33	49
	女	10	20		10	16	
H24	男	16	44	62	16	30	42
	女	12	18		11	12	
H25	男	14	28	39			
	女	8	11				



【団体の部】　総体

回	年度	男子団体 優勝	男子団体 2位	男子団体 3位	女子団体 優勝	女子団体 2位	女子団体 3位
5	H16	沖尚B	沖尚A	名商	／	／	／
6	H17	沖尚A	名護	興南	沖尚	興南	／
7	H18	興南A	宮古	本部	本部(暫定)	／	／
8	H19	興南A	宮古	沖尚	本部	沖尚	／
9	H20	興南	宮古	本部	本部	沖尚	／
10	H21	興南	沖尚A	首里	沖尚(暫定)	／	／
11	H22	本部	興南	名護	／	／	／
12	H23	本部	興南	沖尚	本部	名護	浦添
13	H24	本部	名護	宜野座	名護(暫定)	／	／
14	H25	首里	本部	沖尚	興南(暫定)	／	／

【団体の部】　新人

回	年度	男子団体 優勝	男子団体 2位	男子団体 3位	女子団体 優勝	女子団体 2位
5	H16	沖尚	西原	具志川	／	／
6	H17	興南(暫定)	／	／	沖尚(暫定)	／
7	H18	興南	宮古	本部	本部(暫定)	／
8	H19	興南	本部	宮古	沖尚(暫定)	／
9	H20	沖尚	本部	首里	沖尚(暫定)	／
10	H21	沖尚	本部A	興南	／	／
11	H22	興南	本部A	沖尚	本部	名護
12	H23	本部	名護	／	名護(暫定)	／
13	H24	首里	宜野座	名護	／	／

【個人の部】　総体

回	年度	男子 優勝	男子 2位	男子 3位	女子 優勝	女子 2位	女子 3位
5	H16	小田秀明(西原)	上間　匠(沖尚)	花城高貴史(沖尚)	照屋冷奈(沖尚)	川満陽香理(昭薬附)	上原美希(沖尚)
6	H17	大城大地(沖尚B)	与那嶺諒也(沖尚B)	饒平名知尚(名護)	宮里美香(興南)	上原美希(沖尚)	川満陽香理(昭薬附)
7	H18	儀保　和(首里)	富村真治(興南)	玉城優馬(興南)	上原美希(沖尚)	照屋冷奈(沖尚)	崎原絵奈美(興南)
8	H19	伊良部裕馬(宮古)	富村真治(興南)	嘉数光倫(名護)	知花彩羽(本部)	大城さつき(沖尚)	山里　愛(沖尚)
9	H20	富村真治(興南)	大城康孝(沖尚)	玉城大地(首里東)	与那嶺真代(本部)	大城ちはる(沖尚)	与那覇未来(沖尚)
10	H21	玉城大地(首里東)	渡真利健人(豊見城)	森　勇人(名護)	澤田沙都子(興南)	山口春歌(沖尚)	大城ちはる(沖尚)
11	H22	兼城　大(本部A)	伊差川能治(本部A)	池原慎平(本部B)	山城奈々(浦添)	比嘉真美子(本部)	大城ちはる(沖尚)
12	H23	兼城　大(本部)	古波津栄一(本部)	古波津　怜(普天間)	比嘉真美子(本部)	饒平名まなみ(名護)	伊波杏莉(読谷)
13	H24	与儀聖夏(沖尚)	古波津　怜(普天間)	滝口雅喜(豊見城南)	宮城麻希(浦添)	饒平名まなみ(名護)	津波古味寿乃(名護)
14	H25	玉城海伍(首里)	比嘉一貴(本部)	出口　寿(沖尚)	伊波杏莉(読谷)	翁長由佳(興南)	玉寄紀恵子(糸満)

【個人の部】　新人

回	年度	男子 優勝	男子 2位	男子 3位	女子 優勝	女子 2位	女子 3位
5	H16	花城高貴史(沖尚)	大城大地(沖尚)	垣花健亮(沖尚)	上原美希(沖尚)	川満陽香理(昭薬附)	照屋冷奈(沖尚)
6	H17	与那嶺諒也(沖尚)	与古田将司(興南)	嘉数光倫(名護)	大城さつき(沖尚)	宮里美香(興南)	上原美希(沖尚)
7	H18	玉城優馬(興南)	富村真治(興南)	前川和輝(興南)	大城さつき(沖尚)	崎原絵奈美(興南)	翁長真理子(沖尚)
8	H19	儀保　和(首里)	玉城幸弥(真和志)	前川和輝(興南)	仲村梨　円(本部)	小宮瀬鞠花(沖尚)	与那覇未来(沖尚)
9	H20	屋比久恭平(沖尚)	渡真利健人(豊見城)	池間生弥(宮古)	澤田沙都子(興南)	与那覇未来(沖尚)	山里　愛(沖尚)
10	H21	屋比久恭平(沖尚)	山城泰介(那覇)	末吉孝兵(本部)	嘉陽与希子(具志川)	大城ちはる(沖尚)	山城奈々(浦添)
11	H22	伊波宏陽(本部A)	伊波雄大(興南)	上原良太(興南)	比嘉真美子(本部)	津波古味寿乃(名護)	桐　真珠(本部)
12	H23	比嘉一貴(本部)	崎浜秀磨(本部)	古波津　怜(普天間)	饒平名まなみ(名護)	伊波杏莉(読谷)	嘉数舞美(小禄)
13	H24	玉城海伍(首里)	上原大紀(宜野座)	古波津　怜(普天間)	嘉数舞美(小禄)	伊波杏莉(読谷)	玉寄紀恵子(糸満)

ボウリング専門部

専門委員長
小　山　正　樹

創立60周年を迎え誠におめでとうございます。当専門部は平成19年度に準専門部として発足し、その年の新人体育大会から競技大会を開催することができました。当初は参加７校から男子17名、女子13名が参加しました。平成20年度には専門部として正式に承認されて昇格することができました。参加選手数も年々増加の一途をたどり、本年度の県高校総体においては参加23校、男子93名、女子41名の申し込み状況となり、参加選手数でも比較的上位に位置する競技種目となっていることはとても喜ばしいことです。ボウリング競技が高体連正式種目となったことで、県高体連の基本方針である体育・スポーツの普及・発展と競技力の向上、スポーツ精神の涵養と心身共に健全な生徒の育成に少なからず寄与できていると思われます。まだまだ専門部として未熟ではありますが、ここに至るまでには本当に多くの関係者（県連盟、県ボウリング場協会、歴代部長及び専門委員長）の皆さま方のご協力とご支援があったからこそだということを肝に銘じ、感謝の心を忘れずに活動を続けていく決意です。

ところで、ボウリングというとどうしてもレジャー（レク）的なイメージが固定観念的にあるようで、テレビ等でのプロのリーグ戦や全日本選手権大会などの放映により競技として多少はスポーツ競技として認知されつつありますが、まだまだ認知度は低いと思われます。今後は小学校や中学校段階における普及と指導体制の構築が課題だと思われます。

しかしながら、ジュニアをはじめボウリング県代表選手たちは全国規模の大会においてすばらしい成績を残しています。去る国体九州ブロック少年の部で優勝、全日本ボウリング協会主催の選手権大会、選抜大会で上位入賞、全国高体連加盟連合会主催の全国大会（８月と２月）での男女個人優勝をはじめ団体でも県勢が上位入賞を果たしています。一般においては、日本代表の安里秀策、石嶺加奈子をはじめ女子プロの金城愛乃、宮城鈴菜の活躍は報道等でも知られているところです。彼らのように活躍している選手の共通点は、幼少期より家族と共にボウリングに親しみながら成長したところにあります。そういった点では家族の理解と惜しみない支援のおかげで、全国トップレベルの競技者として活躍できると言えます。どの競技でもそうですが、幼少期からスポーツに取り組むことがその道のトップアスリート育成へとつながっています。

そのような中で、当専門部として取り組み始めたこととして①ジュニアボウリング教室（夏）②記録会（冬）の開催があります。更に今後はPDCAサイクル手法を用いて、県連盟とボウリング場協会と連携しながらジュニア育成のための大会等を企画・運営していく必要に迫られていると言えます。

当専門部発足当初は５名の委員で構成し、年々さまざまな課題を克服していくなかで徐々に専門部スタッフも増加することができ、現在は部長を除いて９名で運営をしています。総務部、強化部、技術部、審判部、医科学部の５部署が自主的に活動して専門部の発展とジュニアの育成の手立てを模索していく必要があります。

ボウリングは日本最大のスポーツイベントである国体の正式種目であり、世界選手権大会やアジア選手権大会などの国際大会が14も開催されている状況の中で、平成元年に石川県高体連にボウリング専門部が発足してから25年が経ちますが、専門部が設置されているのは７府県に留まっています。その７府県で全国高体連加盟連合会を結成し、全国高体連加盟へ向けて日々尽力をしているところです。

最後に、私たち専門部スタッフの活動をそれぞれの学校現場がフォローして頂いてることに感謝を申し上げます。

＜歴代部長＞
高江洲義一（平成19年）
新　　正裕（平成20年～21年）
神谷　勝正（平成22年～24年）
上原　俊幸（平成25年～）
＜歴代委員長＞
安座間俊一（平成19年～24年）
小山　正樹（平成25年～）

ヨット専門部

専門委員長
阿波連　本　周

○ヨット専門部のあゆみ

県内で高校生ヨット部の活動は、1974年に美里工業高校で同好会として発足し、当時、近くの泡瀬ヨットハーバーで活動をしていたクルーザーのヨットグループ「サシバ」のメンバーのバックアップによる活動であった。ヨットを学校で買えるはずもなく、個人の艇を借用しての活動であった。ヨット競技は艇が高価な上に、それを保管する施設、揚降の出来るスロープ、十分な水深、広さの海面が必要なため、普及していく上での制約が多いマリンスポーツである。美里工業高校ヨット部活動の拠点を、泡瀬ヨットハーバー、その後、泡瀬の漁港、馬天港、佐敷マリーナと転々と変えていったのである。部に昇格した年（1975年）に初めて三重国体に参加し、その後、毎年国体に出場することになる。特に1979年は高体連の中に専門部のないまま、その時の理事長内原徳淳先生の尽力により、宮崎で開催された九州総体に出場させて頂いた記念すべき年であった。しかしながら顧問であった渡嘉敷兼正先生が宮古工業高校に採用され、その後、ヨット部はつぶれていくことになる。

昭和62年の海邦国体のため、那覇工業高校は男子の指定校として宮古工業高校から転勤してきた渡嘉敷が顧問として活動を始め、宜野湾高校は女子の強化校として本田が指導にあたった。それぞれの学校から遠い佐敷マリーナまで、毎日放課後、通っての活動であった。

全九州高校ヨット競技大会には、翌年の60年から毎年出場しており、61年には優勝、準優勝をする活躍をし、海邦国体の年（62年）にはFJ級で宜野湾がアベック優勝という快挙をなしとげた。

海邦国体を前に、高体連の組織としてヨット専門部の設立を試みたが、高体連の専門部設置基準に達せず、断念。九州予選を突破し、全国大会にも出場したが名簿には記載されず非常に寂しい思いをした年もあった。

平成４年に復帰20周年を記念して、九州高校総体を沖縄県で開催のため、高体連の組織としての専門部が是非とも必要となり、初代専門委員長本田により、平成元年には専門部設立の手続きをすすめ、平成２年３月理事会で準専門部として認可された。初年度は専門部設立規定に基づき、準専門部としてスタートし、平成4年から県総体、新人大会を運営している。

○現在の活動状況

2010年平成22年度美ら島総体を期に活動を与那原・西原マリーナ（仮称）へ活動拠点移し、活動しています。与那原マリーナは、中城湾の南側に位置し、周囲が本島の地形に囲まれ、しかも海底が砂地なので非常に安全に帆走ができる環境である。

地域の高校、県立知念高等学校の生徒を中心に昭和薬科附属高等学校、沖縄水産高等学校、首里高等学校、カトリック高等学校が活動しています。特に知念高校においては、平日の放課後もヨットに乗れる環境なので競技力向上が著しく、競技力の高い九州水域予選を突破し、平成23年度全国インターハイにも出場するまで競技力が向上しているので、今後の活動でも期待大である。

○今後の課題

更なる競技力向上のためには、指導者の育成が必要不可欠である。現在、知念高校に一人しかいないという現状であり、知念高校においては、ヨット部創立5年目にして、与那原マリーナでの放課後練習のおかげで競技力が著しく向上・定着している。また、土日祝祭日には、県連の方々の多大なサポートにより各校合同練習ができ、大変感謝しております。これまでの課題であった人数の確保も地域、近隣中学校にもヨット競技というものの認知度が高くなってきて、競技人口が多くなってきている。しかし、指導者の転勤という避けられない課題が残る。今後も継続活動を強く望む。

また、現在、宜野湾マリーナに置けなくなったセーリング連盟の艇、数十艇あり、野ざらしの状態で与那原マリーナに一時、置かせてもらっている。台風被害や直射日光、砂埃を受け日々消耗している状況である。一刻も早く艇庫（艇が保存できる倉庫）の建設を要望中であるが見通しが全くついていない現状である。

また、高校で使われているFJ級という艇種は、2015年を境に艇種の変更が決定し、420という艇に変更が決定しているので、艇の購入を検討しなければならない。

ヨットレースは参加全艇が一斉スタートしてコース回航するので多くの艇数でのレースを経験することが必要である。そのためには県外に遠征してレース経験を積むことが強化の条件となる。しかしながら、艇の輸送料が高額なため、県外遠征というわけにはいかず、そのハンデの克服が今後の課題である。

定時制・通信制支部

常任理事（定通支部）
宮　里　　清

高体連創立60周年を心よりお祝い申し上げます。定通支部はバレーボール、バスケットボール、卓球、ソフトテニス、サッカー、バドミントン・剣道・柔道・軟式野球・陸上の10種目の競技で実施されております。

ここで平成16年から平成25年までの定通制の全国大会の成績や活躍を簡単に紹介致します。

1. バレーボール

男子は平成20年に北部農林がベスト８、女子は平成17年八重山商工、平成19・21・22年に泊夜間、平成23年に泊午前がともにベスト８に入る活躍をみせた。

2. バスケットボール

男子は平成22年に星槎国際が3回戦、平成25年に泊午前が２回戦へ進出したが、その他は初戦敗退という全国の高い壁を突破できていない。女子は平成16年に泊午前がベスト８に入る活躍を見せ、平成19年の泊通信、平成22年の星槎国際、平成24年の泊午前も初戦を突破した。

3. 卓球

団体男子では平成16～18年の沖縄工業や平成19年平成24年の泊通信、団体女子は平成18・19年に中部農林が2回戦に進出する活躍を見せた。
個人男子では、平成16年の山内悠司（沖工）平成17年の名嘉満（泊通信）が4回戦まで進出した。

4. ソフトテニス

団体の部では、平成17年に男女とも沖縄選抜として挑んだが、全国の壁は厚く初戦敗退であった。

5. サッカー

平成16年に沖縄工業が初戦を突破した。平成17年以降は那覇工業や泊午前などが出場するが1回戦敗退が続く。

6. バドミントン

団体男子は平成19・22年の泊午前、平成21年のコザ、平成24年の泊通信が2回戦進出を果たした。団体女子は平成20年の那覇商業、平成21年の泊午前が2回戦進出を果たした。

7. 剣道

団体の部のエントリーは無いが、個人女子では平成16年に城間渚（泊通信）が３回戦に進出した。

8. 柔道

団体の部では、平成16～19年に沖縄選抜として挑むも２回戦で敗退した。個人男子では平成24年に波平拓也（泊午前）が重量級で大健闘し３位に入る活躍を見せた。平成18年には中量級で宮里博文（泊夜間）、軽量級で高屋順一（中部農林）がともにベスト８に入った。

9. 軟式野球

平成18年に那覇商業が大躍進を見せ、決勝戦まで勝ち進み、決勝では徳風通信（三重）に３-11で負けはしたものの堂々の準優勝という活躍を見せた。平成16年の泊午前、平成20年、平成22年の那覇商業もベスト８に入る活躍を見せた。

10. 陸上競技

トラックの部で輝かしい成績を収めたのが、平成18年の知花豊（那覇工）である。男子100mを11秒18で優勝し、続く200mでも23秒19で2位となった。知花豊は平成19年にも100mで優勝し２連覇を果たした。一方、フィールドの部も大活躍であった。平成22年には玉城孝朗（泊午前）が走高跳で１m94を跳び優勝、翌年には走幅跳を６ｍ38で2位、走高跳で３位となった。平成23年には大城雅志（那覇商）が砲丸投で12m57を記録し優勝した。また平成17年の西筋優貴（那覇工）が砲丸投で２位（12m97）、平成21年の市村智が円盤投で２位（32m60）、平成22年には那覇工業の金城匡也（走幅跳）、知念慶介（三段跳）も共に３位に入る活躍を見せた。フィールドの部の選手達の活躍で、平成21年には男子フィールドの部で２位、平成22年には男子フィールドの部で１位となる素晴らしい成績を収めた。また平成25年には砲丸投で全国大会出場した喜屋武雄介（泊夜間）が石澤奨学会理事長賞を受賞した。

定通制は制限された時間の中での活動でありますが、このような優秀な成績や活躍が出来るのも各専門部の支援や協力があってのものだと感謝を申し上げます。また平成25年３月31日をもって沖縄工業高等学校の定時制が廃課程になり、定通制では各競技の運営や派遣等でも様々な課題があります。　しかし、これからもより一層の努力を重ね、更に精進したいと思います。

最後に県高体連の益々のご発展を祈念すると共に、これまで定通支部を支援して下さった関係者各位にあらためて感謝を申し上げ、今後ともより一層のご指導ご支援を承りますようお願い申し上げます。